

『とんとむかし（総集編）』

山形県東置賜郡高畠町の民話  
福島県耶麻郡西会津町の民話

千葉大学日本文化研究会  
民話分科会編

本書は、一九七五年（昭和五十年）十一月一日に発行された民話集『とんとむかし』第四集（水の研究）をもとに改変し、あらたに『とんとむかし（総集編）』として一九七九年五月一日に発行された手書き謄写版刷りの民俗調査報告書『とんとむかし（総集編）』をリポジトリ公開用に活字化した覆刻版です。

本書を作成するにあたっては、明らかな誤字脱字等を修正したほか、漢字とひらがなの使い分け、および句読点の位置の変更等をおこなっています。また、誤読しやすい部分には、ルビ・注釈などを付け加えたほか、地名・住居表示などは、調査当時のままで表記しています。

なお、現代では不適切な表現と思われる文章表現等については、当時の執筆者および話者からの採話を尊重し、そのままの言葉遣いで掲載してあります。

## 序にかえて

深野弘美

『とんとむかし』第四集が発行されたのは、一九七五年十一月のことでした。あれから、三年余り。今ここに改めて、『とんとむかし』総集編を編むことになりました。掲載した話は、一九七五年三月、山形県東置賜郡高島町、同年七月、福島県耶麻郡西会津町にて、私たちが採集したものです。

当時、私たち民話分科会は、会員数も二十余名を数え、テープレコーダーを肩にしては精力的に採集活動を行っておりしました。一日ひとつも採れないが、何かしらの土産物を抱えて帰ってくる者、日に数本というバスに乗り遅れて山道を歩いてくる者、酒を勧められて赤い顔で帰る者など、調査合宿の思い出は尽きません。

しかし、かやぶきの家が取り壊され、牛や馬がいなくなり、村が変容するとともに、口伝えの民話は、今まさに消

え去らんとしています。地元の方でさえ、己の町のすばらしい民話の数々を知らずに過ごしている場合もあるのです。私たちの拙い小冊子が、それらの方々に郷土をふり返っていただく、きっかけにでもなれば、嬉しく思います。私たちの突然の訪問を厭わず、親切に協力して下さった高島町、西会津のみなさまに心から感謝し、この小冊子をお贈りいたします。

一九七九年 春

もくじ

序にかえて . . . . . 二

高畠町の概略 . . . . . 五

【高畠町の民話】

高安犬の宮の話 . . . . . 六

犬の宮 . . . . . 七

猫の宮 . . . . . 八

猫の宮の伝説 . . . . . 九

佐兵ばなし . . . . . 一〇

弥三郎ばんば① . . . . . 一二

弥三郎ばんば② . . . . . 一四

おりや峠 . . . . . 一四

鈴沼の話 . . . . . 一七

猿むかし . . . . . 一八

はん子 . . . . . 一九

糠野目の御山王様 . . . . . 二一

南の山の馬鹿むこ . . . . . 二四

狐むかし . . . . . 二四

和尚と小僧の話 . . . . . 二六

こぶ出しじいさん . . . . . 二七

おいとからいと . . . . . 三二

西会津町の概略 . . . . . 三六

【西会津町の民話】

首塚・胴塚・足塚 . . . . . 三七

鉄火の裁き . . . . . 三八

猿むかし . . . . . 三九

機織り滝 . . . . . 四一

猫檀家 . . . . . 四一

狐の証文 . . . . . 四二

三匹の有名な狐 . . . . . 四四

鬼ばばと和尚さま . . . . . 四四

鬼んばの話 . . . . . 四九

スズメと甘酒の話 . . . . . 五二

みょうたらてん	．．．．．	五三
豆まきの話	．．．．．	五五
弘法さまの石	．．．．．	五七
上野尻の山には椿の木が一本もない理由	．．．．．	五八
お釈迦さまの話	．．．．．	五八
割り石	．．．．．	六〇
今の安座ができるまで	．．．．．	六〇
弘法大師とあまんじやくの話	．．．．．	六一
胡麻を作らぬ話	．．．．．	六二
ばか婿の話	．．．．．	六二
沼沢沼と大清水の湖底がつながっているという話	．．．．．	六四
のろぼうずの話	．．．．．	六五

【民話によせて】

弥三郎婆によせて	．．．．．	六六
犬の宮の伝説	．．．．．	六八
合宿の思い出	．．．．．	七〇

合宿の思い出	．．．．．	七一
昔話など	．．．．．	七二
民話探訪夜話	．．．．．	七四
私の民話	．．．．．	七六
【高島町・西会津町】		
むかしばなしの語り方分類表	．．．．．	七九
高島町・西会津町の民話（話者と題名）	．．．．．	八一
民話分科会名簿	．．．．．	八三
編集後記	．．．．．	八四

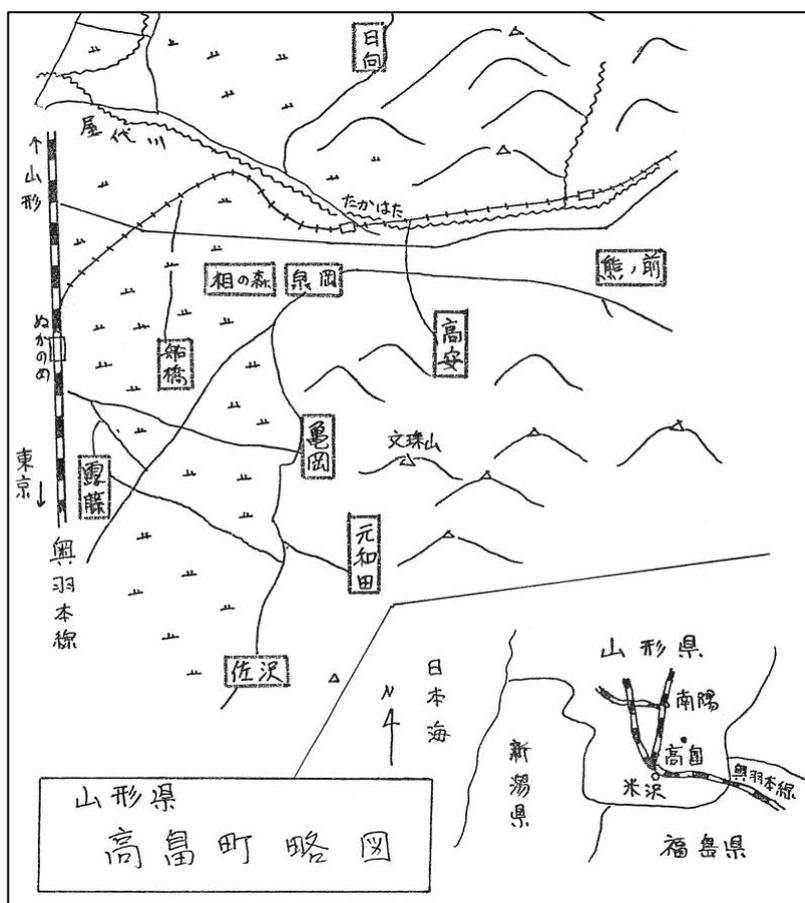
## 高島町の概略

高島町は、山形県南部の東置賜郡に属し、米沢盆地の東部、屋代川の溪谷に発達した中心集落で、面積は約一八〇キロ平方メートル、人口は、約三万人である。

中心の高島町は、伊達氏が宮城県岩出山城に移る前の城下町で上杉時代になって城代がおかれたが、一六六四年、幕府領となって廃城、陣屋が設けられた。

一七六七年に織田氏領となり、一八三〇年に居城を天童に移すまでの六十余年間は、ここに藩庁がおかれた。そして一九五四年、二井宿・屋代・亀岡・和田村の四村と合併して社郷町となり、一九五五年、糖野<sup>ぬかのめ</sup>目村を編入して再び高島町と改称した。

屋代川の谷口集落には、製乳・製材・果物缶詰・ジークライトの工場がある。二井宿はもと二井宿峠下の宿場町で、今は、酪農<sup>たけのもり</sup>が中心である。竹森には、製糸工場があり、製糸業も盛んである。一帯の農村では、米・洋梨・葡萄・林



檜の産が多い。

亀岡の文殊堂には、隣県からの参拝者も多く、高安<sup>こうやす</sup>は、高安犬で知られている。

## 【高畠町の民話】

高安こうやすの犬の宮の話

(高畠町・元和もとわだ田) カッコ内は採話地区名

昔、高畠町の高安にムジナいたど。そのムジナが人年貢ひとねんぐをとって食っていたんだと。そうして、高安には人年貢とっていかれるもんだから困っていたんだ。

踊ったり歌ったり、どんちゃん酒盛していたど、ムジナがな。そこへな、座頭、目の見えねえ人よ、道に間違っってそこへ行ったわけだ。そして、ジャンジャン踊っていたどこさ行ったもんだから、ムジナどもは、

「かり（狩人）ゆうどんでもあれば、はむかって来るべが、座頭だからな」

って、ムジナは小馬鹿にした。

「座頭、誰も見ねでどこさ行くところだ」

「俺は目が見えねえもんだから、道に間違っって来たどこだ」

と。そんで、

「どうか、今晚一晩だけ助けてくれや」

なんて言っって。ムジナは座頭だと思っって馬鹿にして、

「はあ、よしよし。ほんじゃ、ずいぶん難儀してきたべ。俺たちは酒盛したところだったんだけど、このことは決してよそさいって語るなよ」

と言われたがよ。座頭のほうは、

「んじゃ決して、よそさいって語んねがら」

って、まず約束して、そうしていたが、座頭といたって、本当の人間だから、

「いや、俺は語れば殺されるっつごどがあっから、語んねってことを約束したげんども、俺は人間だから、俺は殺されても皆のために語んなくてなんね」

と、こう思っったわけよ。そうすつとムジナは、

「三毛（みけけん）犬と四毛（しけけん）犬にだけは、そいつにだけは教えんな」と。

三毛犬と四毛犬というのは、三毛の犬な、それに四色の

色の四毛犬とな、それだけは教えねえでくろと。そいづ教えねえことを約束したけんども、座頭はこの夜は山越して行げねがら、酒盛しているところでごつつおになって、

「俺はどうでもいいけんども、こいづはみんなさ話して、三毛犬と四毛犬という強い犬だけには教えなくちやなんねえ」

と心に決めていた。そして、下がって来て教えた。

三毛犬と四毛犬は甲斐の国の犬で、(※注釈)下海上山の竜法寺という寺で飼っていた。そいづを一夜のうち借りて、高安さひいでったわけよ。そうづつと、化げでっから人のように見えつけど、犬の目にはムジナだからな。そこで、組討ちして、はあ、どっちも力尽きて、両方倒れてしまった。その犬を祀ったのが高安の犬の宮だ。

(※注釈) 下海上山・・・和田部落にある山

## 犬の宮

(高島町・高安)

この部落に『ムジナダイリ』というところがある。

昔、そこにムジナが巢食っていて、やっぱりここさ出て来て一年にひとりぐらいつ娘をあげるつつうんだな。そうすつと、今年ほどの家さ、あたってつから、そのムジナなあげないと村さ荒らすつということ、何年間も続いたんだな。

子供には申し訳ないけんども娘さ、あげつと部落にいい娘さ、あつと白い矢ぶつたつていうんだな、伝説に。ムジナつたつてよう、山賊みたいんだから高い山さいて、常に歩つたりなんかいたりしてよう。

まず、この家がいいのいたと、村一番のいたというつと、今でいう『ミス』だ、これねえ。

その『ミス高安』さ、いるつつうと山賊の親方の次あたりが矢ぶつて屋根の上さ立つたつうと、あげなあんなかつ

たつうな。

ここにムジナダイリというところがあんだけんども、そこから、そうだなあ、峰づたいに行くと『舞台岩』つう大きい岩があるんだ。一枚の大きな。畳だと十枚くらいな。そこでやっぱり酒盛をして、ムジナが遊んでいたというわけだな。

こうして、まったくむごいことがムジナとの関係であったもんだから、ほんとうに何とかムジナを退治しようと考えて、みんなが集まって考えた末のことが、ムジナが酒盛りをしているところへ犬でも放して、人間ではかなわないものだから、やっぱり退治してもらおうなんてことになっちゃわけだ。

そいだから、まあ、甲斐の国まで行って、『ミケゲン』(三毛犬)

『シケゲン』(四毛犬)という二匹の犬を譲り受けてきたわけだなあ。で、その犬を、ムジナが舞台岩で酒盛してつとこき放してやっただと。そして、ムジナと犬の戦いが続いて、ムジナもみんな死ぬ。犬もその疲れで死んでしまったと。

そのために、精根つきで死んだ二匹の犬を部落の鎮守として祀ったのが犬宮いぬのみやだというなんてなあ、聞いたもんだ。

#### 【注釈】

『犬宮地蔵尊』というお宮がある。

『ムジナ』は山賊のことだとも、ほんとうにムジナだったとも言われているようであった。この話の時代には、高安では七ノ八軒の家しかなかったそうだ。

#### 猫の宮

(高畠町・高安)

≪犬の宮の話と続いている。その後半≫

・・・そしたら犬を借りにいった人さ、こんだへビが祟ったんだね。その庄屋の家で『タマ』というかわいいネ

コ飼って、かわいがっていたんだけど、毎晩のように便所  
さ行くにも、どこさ行くにもついて歩くんだと、そのネコ  
がよう、奥さんの後を。

そして毎晩便所の戸口の所で、中さ睨んでるんだと。そ  
いだからよう、その奥さん気味悪くなって、だんなさ聞い  
てみたんだって。そしたら、そのだんなが奥さんのまねし  
て行ったら、またネコが便所の戸口の所で天井の方を見て、  
じつと睨んでるもんだからよう、

「今までかわいがっていたのに、その恩を仇で返すか」  
って言って、だんながネコの首さ刀で切ったんだってよう。  
そしたら、その首が飛んでってよう、天井にいた大蛇さ、  
こう食いついて殺したんだ。その大蛇を埋めたのが、小郡山  
というところの蛇壇だ。

## 猫の宮の伝説

(高島町・高安)

あるお嫁さんが、便所さ行くとき、ネコが追っかけてつ  
てよう、上向いてニャーツ、ニャーツていって、かかつて  
わかんねえんだって。ほして何回いってもよ。そして、お  
っかなくておっかなくていたんだってよ。

そした、こんだ、だんなさんが嫁さんの格好して便所さ  
行っても、上、睨んでカーツてよう、かかるんだって、そ  
のネコがよう。そしてだんなさんは気持ち悪くなって、短  
刀抜いて、ネコの首を切ったんだ。だんなさんがよ。そし  
たら、ネコの首がポーンと飛んでいって、便所の上にいた  
大蛇のところさ食いついたんだって。そして大蛇は食いつ  
かれたもんで、唸り唸り行って、隣り部落の小郡山って  
いう所のへび壇ていうとこまで行って死んだんだって。

猫の宮は、ネコがおまいぶつで観音様なんだな。

佐兵ばなし

(高島町・露藤つゆふじ)

佐兵という人が、その非常に、そのたけて。まあ一例をあげると、その佐兵という人が、最初大きなキリダメ(重箱の大きな物)に焼き飯にぎりだけ持ってね、その関所を行くんだ。すると役人がいて、

「こら、きさま、何持ってた」

こう言われると、

「穀物だ」

とこう言う。

「何だ、きさま、穀物なんて持ってるんだ」

ってふた取って、おろあわしてみると、焼き飯が入ってる。

「なんだこのやろう、焼き飯じゃないか」

そして、

「焼き飯だって穀物だろう」

って言った。そういうことを二、三日繰り返すんだ。そう

すると、あの野郎ばかだから、かもうなということになって、そうすつと今度は、米とか小豆とかを持って行って、そして売ってきたわけ。非常にその、とんちというか、才がたけてるかって、利口だけど、風采ふうさいはあがない男だったそう。だけれども、そしているけれど、それぐらいの才を持っておって、じいっと落着いて、その仕事されない人だったらしいんだ。それで成功しなかった。

こんだ、樽におしっこをつめて通ったんだ。そしてこれ、酒、そういうものはみな禁止だから。そうすつと、これ何だろうって、きさま酒しよって。

「ばか言うな。これはしよんべんだ」

つつた。まさか新しい樽にしようべん詰まってるなんて思わんもんだから、蓋を取ってかいだそう。そうすると、これやったら、『あの野郎、ばかだ』で通ってるから、そうして酒運んだそう。

それから、おもしろい話はたくさんあるんだ。この人は逸話を残して・・・

綿入れを質に入れたっていうんだな。綿入れを持ってって、そうして流れる時期にきて受け出しにいつてやったと。

「それでは」

っていうんでもらって来たところが、

「だんな、少し足らねえものがあるな」

って言ったと。

「何だ、何ある。このとおり、立派に保存した」

「いや、俺いったとき、しらみがいたはずだ。そいつが今いない」

って言って質屋を困らせたって話があるんだ。

「俺がおくときは、しらみが何十匹といたはずだ」

って言ったちゆんだな。まず、それもひとつ。

それから、魚屋へ行って、魚を買おうとしたら、魚屋の

親父おやじもいわゆる茶目っ気というか、ユーモアというか、そのとんだ奴だから、

「こら、おい魚、おまえは佐兵のところに行くか、行がねか」

って言った。聞いたら、魚、お前のところへ佐兵のところへ、行ぎたくないから売らんねえって言ってるって。

そうすると、佐兵黙って帰ってきて、今度四、五日して行ってね。ご祝儀、婚礼に使うやつだから、鮭を切れ、カレイを切れって言って全部切らせておいて、

「おう、魚屋へいぐか、いがねえか」  
つつつた。

「銭が魚屋へいぎたくないって言うからやめた」  
って言って、仇をとったって話があるんです。

そして、最も逸話になったのは、入生田いりゅうだの『右近のちゆうない』っていう人の家だな。明治の前、その人、片目の人でな、これも風采のあがんなかったそうだ。よくこの家には手伝いに行ってたそうだ。

そして、あるときに行って、この人あぎつぽいもんだから、あっちこっち、三日、五日ぐらいずっと歩いて生活してたんだな。佐兵ちゆう人は。だからその人（右近のちゆうない）も、これ非常にできて、今なら物知りで、その何

かの裁判官の下みてえな、争いが起きると、そこへ行って解決をつけてくれたんだ。その当時の有力者っていうかな。それで話のついでに謎をやる。

「おい、佐兵とかけて、何と説くか」

って言ったら、佐兵がこうしてたけど、佐兵わかんねえだろうなって、だんなが、

「おまえはたんぬ<sup>(たむし)</sup>しって説くだ」

「心は？」

つつつたら、ちようどその佐兵が、心はつつつたら、

「食い食いまわるだ」

つつたそうだ。そうすると佐兵が、今度は、返歌して、しつぺ返して仇とりだ。

「それでは、だんなとかけては？」

つたちゆうだな。

「わかんねえだろ、だんな。三三九度の盃と説く」

つつたと。

「これはめでてえなあ」

つて、そのちゆうないつて人、

「心は？」

つてだんなが聞いた。そうすると手をあてて、

「一生のかため」

つて言ったそうだ。

弥三郎ばんば ①

(高畠町・船橋)

弥三郎ばんばは、『おっかな橋』のすぐ近くにすごい池があつてな。その池の中さ、昔、往来の人を皆さ殺して、そして金を取つてその池の中にぶちこんだ。

ある人が赤ちゃんおぶつて通ると、その赤ちゃんのお尻さ、針で刺したつうだ。針ちつくらちつくら刺すもんだから泣くわけだ。つうと、

「ねえちゃん、ねえちゃん、赤ちゃんが泣くから、おろして乳飲ませろ」

てこういうことだったそうさ。そして、まず乳飲ました矢先、その赤ちゃんをガーとさらって、とばしてやって、はあ家へ行って、血吸ったのなんのって話があるさ。

ある夕方、そこを侍が通ったと。そしてそこを通ったとき、あそこにすばらしい鬼婆（恐ろしい）おにばばがいるっていう話を聞いたもんだから、

「おれが退治してくれましょう」

とあって、そこさ立ち寄ったと。退治しようとしたら、すぐ金取られるとこだったと。そしてたら鬼婆の腕を切ったと。そして鬼婆が血だらだら垂らして一本柳いっほんやなぎつうとこさ、這ってたと。そして小さい藁小屋に入って、ウーンウーンて唸ってたと。そしてその侍が行ってみたら、血垂らしたとこ辿たどっていくと自分の家だったと。前（以前）ど自分が育った家。そして行って訪ねて、

「ここへ泊めてけろっ」

て寄ったんだけど、ウーンウーン唸ってるもんだから、

「かあさん、かあさん」

て言ったんだと。自分の家、おかあさんがいたと思って。そして、

「俺、ちよつとてがらしてきた」

て侍が教えたんだと。

「これ、腕持ってきたから見て」

てそのおばあさんの前さ、片腕出したと。そしてたら、そのおばあさんが、すばらしいまずけんまくで、

「その腕こそ、俺の腕だ」

つうて、破風から雲呼んで飛んでったつう話聞いたもんだ。

そして、その飛んでった先が、新潟の弥彦山さ飛んでったんだと。今だに弥彦神社に祀られてるわけだ。

そして、何のために往来の人妨げたかつうと、おまえのために私が軍用金を奪ってたつうわけだ。

後述・・・（今でも、われわれが、一本柳にお参りに行くと、新潟の弥彦では、こつちを恋しがって荒れる。それで

天氣が悪くなる。）

弥三郎ばんば ②

(高畠町・高安)

一本柳(地区名)の太い柳の木のところによろ、ばんばが住んでいたんだなあ。そこを通るたんびに通る人から金を取っていたんだ。おいはぎだな。そいつを息子が非常にいやがったわけだ。そして、息子はよう、江戸の方さ修業に行ったんだ。弥三郎って息子なわけだ。そして、その息子はたいした腕をみがいて帰ってきた。

そいつを知らないで、弥三郎ばんばは自分の息子をおいはぎしようとしたんだなあ。

弥三郎ばんばは、旅人を一晚泊めて、泊まったものの物を、みな、はぎ取るわけなんだな。そのばんばは、その侍

の格好した息子の物をはぎ取ろうとしたが、はぎ取らせなかつたわけだな。そう思ってきたから。

息子だとわかつたばんばは、こんだ逃げたんだな。ばんばの方がおつかなくなつたんだな。そのばんばの家は一軒家だつたから、村の中のほかの家さ逃げたんだなあ。

それからは、もう追い剥ぎしなくなつたわけだ。

おりや峠

(高畠町・泉岡)

おりや峠というところにな、こころ辺ではまず、鈴沼の話にひつつけるようだが、猟師がいたつたわけだ。鉄砲ぶちがよ。それにまず、娘がいたつたわけだ。ほつと、猟師が山さ行ったときにな、すばらしい大蛇が、ちようどあそこの山七回り半もぐるぐる巻いでよ、昼寝しとつたわけだ、

大蛇が。

ほっと、そいづを鉄砲でぶってな、家さ持つてきて、こんだ味噌漬にしていたわけだ。そしてその猟師、そのおやじだけが食ってたわけだ。その蛇よ、大蛇。そして毎日こう、丈夫で行ぐもんだからよ、そしてその娘ちゃだけ、

「あいつだけは食うなよ」

ってこう教えてっちゃわけだな、その娘ちゃんにな。あんまり見んなよって言うもんだから、娘、その娘はこんだ見だわけだ。

ところが、いやうまくてうまくてよ。一つ食ってみたり、一切食ってみたけども、とても、うまくてうまくてしよ。うねえもんだから、二つ食った。それでも、とてもうめえんだな。ほっと、みな食っちゃっただ。みな、かめの中の漬かったの、味噌漬にしたのよ。

ほしたば、こんだ、のど乾いで、のど乾いで、しょうがないもんだから、鈴沼さ行って、のど乾いで水飲んだわけだ。そして、ガボガボ、ガボガボ、水飲んだだが、中の水、

みんな飲んでしまっただ。まずよ、その娘よ。そして、いやいやまずこんだ、やつとすつとのど乾いたの治っただ。見たところが、しつぽ、しつぽ出でよ。自分がこんだ、蛇になつてたわけなんだな。あんまり水飲んだから。その蛇の肉、食ったひががよ。こんじゃえまず、家さいがんねえてじゃがね。あそこに、鈴沼までに・・・

そんで蛇になったもんだがらこんだ、そこら荒らすわけだ、こんだ。一匹、二匹のうさぎや何食ったってわかんねえわけよ。ほして、悪いこととしては、山さ行って、グウグウって寝て、寝てるわけだ。

ほうすつと、その峠を座頭がな、新潟の方から、こう座頭が、目の見えない人だんべな、やつぱあっちだ。新潟の方、座頭いっから、あっちの話だ。座頭はトボトボと歩いてきたと。そして、退屈なもんだから、日が暮ってしまったちゆだ。そこで。で、どこか泊まったとこねえかと思つてみたところが、ま、一軒のあばら家、あつたもんだから、そこさ行って、

「二晩泊めてける」

ったところが、そのきれいな娘が出てきて、

「二晩泊めてくれっちゃ」

てわけだ。そしてその、

「どっから来た」

ったところが、

「おら新潟の方から来てただ」

と。

「そんじゃ、さまさまのまず、おもしろ話でもあんべえ」

ちゆうので、その語ったりな、歌を歌ったりして、一晩げ

まず、にぎやかに、おいやしたわけよ。そって、次の朝げ、

出てくつとき、

「俺は実は、その大蛇だ。このことは、村の、けっして村

さ行つたとき語んな。」

とこういうことを言わってきたと。そしてまだ、

「一番嫌いなものは、鉄の棒と煙草のやにだ」

と。

「ことうことさも、けっしてまず、村さ行つたら語んなよ」

つていうぐらいに語らつていたさ。部落さ戻ってきたわけだな。

ほしたところがまあ、その荒らされようが大したわけだ。

その大蛇が荒らさっちゃ部落の人の、困っていたことがよ。

そんじえば、おれ一人ばりだけ死んだって、部落のために

なる位のことならば、すかたねえつていうなで、その庄

屋さ行つて、

「実はその、ことうところにいる蛇がいやしたこんだけ

ど、そいつには鉄の棒とやにが大嫌いだそうな」

ていうようなこと教えたもんだから、庄屋、村中さふれを

出してな、かじ屋は金の棒を作る。それから、煙草のみは、

やにを作る。そしてその金の棒さ、やにを塗つて、蛇が出

てくつときさ、立てたわけだ。ことう柵をたてた。

そしたば、蛇がまたこんだ、腹減つて、まず、しょうね

えもんだから、にわとりでも捕つていが、犬でも捕つたら

いいかと思つて出てきたわけだべ。そつとその、やにと棒  
とでな、身体さ皆みなくつついて、はあ、その蛇はまず、死  
んでしまったと。そしてまず、その坊さまのどこまず、村中  
がうんと礼をして帰したと。

## 鈴沼の話

(高畠町・高安)

ちようどこの上の『塩森』しおのもりという部落に、『館』だてという  
殿様だったか・・・名主だと思ふんだけどな、そこさ嫁に  
行つたんだ。

ここの部落のやっぱし名主とか何とか、嫁に行つたとき、  
その『清水ヶ原溜池』しみずがはらためいけという池を持参して嫁に行つたんだ。  
そのときは、清水ヶ原溜池は、この高安の所有にあつたん  
だ。その池さもらつて、(嫁の名前)のぞみさんは、塩森さ嫁いで行つ

たつてわけだな。

ところが、縁つたなく、やっぱりその、不縁になつたつ  
てことだな。その際、主人はやっぱり返さつてしまつたけ  
んども、もらつていったものは、向こうさ置いてきてしま  
つた。ということ、地図が、大字高安鈴沼つてことにな  
つてゐるんだけれども、現在は、この部落を主体にした、  
清水ヶ原溜池組合つのが、六ヶ村で経営してゐるんだ。普通、  
鈴沼、鈴沼つて呼んでゐるんだけれども、正式には、清水ヶ  
原溜池というんだ。この年、三ツ返山も、そのときから持  
つて行つてしまつた。

寛文年間のことだそう。

猿むかし

(高島町・日向)  
ひなた

三人の娘いやったんだと。かしこい子供らだったんだと。

三人とも。その家、(お母さん)おかあさいねくて、娘三人いて、

(お父さん)おっさま田さ水かけてたと。田植えすつからよ。田さ水かけんのに、日照りで困難でよ、おやじ様、しんぺいしてたとこさ、猿来たんだと。猿来て、

「日照りが困った。水かけられねくて」  
とおっさま、言ったそうだ。

「そんじやらば、俺かけてやる。一晚のうちにかけてやる。どれかひとり、三人のうちひとり、娘くれる」

そすと、水かけてもらってから約束だから、娘三人のうち、くれなくちやなんねえわけだ。そすと、おっさま、寝てて、起きねと、朝になって、

「おまま、あがれし」

とまず、大きい娘、言ったんだ、枕元さ。

「おまま食うから、俺の言うこと聞いてくれ」

と言ったんだと。

「こいう訳で、猿に水かけてもらったから、猿のお方になつてくれる」  
と言ったんだと。

「俺の父ちゃん、何語ってか、とぼけたこと語ってんな」と大きい娘、行っちゃまったと。そして、

一番目の娘に言ったんだと。そうすればよ、またその通りだったとよ。同じよ。二人とも聞かねで困ったんだ、父ちゃん。

今度、三番目の娘、行ったんだと。そすと、

「猿のお方さなつから、起きて、おまま、あがってくれろ」

そして、こんだ、猿のお方さなつて、行ったわけだ。猿の近所だったんだと、その家は。んだもんだから、猿にもらわれて行ったんだと。

お節句になったんだと。お節句になったもんだから、

「父ちゃんさ、餅ついて、お節句でも行かねえかな」

と言ったんだと、猿が。そして、臼で餅ついたんだと。餅ついたらば、

「重箱さ入れて持っていくべ」

と猿言ったら、

「俺の父ちゃんは、重箱くせえって食べねえ。臼がらみ、しよってつてくれ」

と言ったんだと、その娘。臼がらみしよってつたんだと猿は。

ずっと行く途中に、きれいな花咲いていたと、大きな木さ。

「お花きれいだこと。父ちゃんさ、一枝持つてつて、見せつちもんだな」

と、奥さんになったの、言つた。猿は、木登り上手だから、

「臼おろして、花、折ってくる」

と言つたんだと。そすと、

「俺の父ちゃんは、臼下さ置くと、土くせえって食べねえ

から、臼しよって登つて取つてくれ」

と言つた。猿、臼しよって、木さ登つて、枝、おしよつと思つたんだと。

「いま、ちつと上。いまちつと上」

と、その娘、よくよく、すんぱいさ上げて、枝が折れたつていうんだ。

そうすつと、大きな川があつたもんだから、臼がらみ、流さつちやと。

はん子

(高畠町・熊前)

あるところに、ひとりの農夫がいて、毎日毎日、日照りで困っていた。そこに鬼が来て、

「お父さん、どうした」

日照りなもので、田が枯れてしまうと、がっかりしているもんで、お父さんには、娘が三人いるので、

「雨降らしてやるから、おまえの娘ひとりくれる」

と言うので、お父さんは、苦しまぎれに承知して、そうしているうちに、田がみんな枯れていると、雨がザーッと降ってくる。

「いい雨だ」

と言って、田がしつとりとして、青々としてきた。お父さんが喜んでいて、娘をやることなど忘れていると、鬼が娘をくれると言ってくる。一番大きい娘は、

「鬼のところなど、行けねえ」

そして、二番目の娘のところさ、

「どうか、俺の頼みだから、鬼のところさ嫁に行ってくれろ。水不自由なとき、雨降らしてもらったから」

言うけど、言うこと聞かなくて、三人目の娘が来て、

「俺、嫁行くから」

鬼は、袴着てもらいにやって来た。

六年も経過して子供がいた。はん子という名前をつけた。お父さんはどうしているかと心配して、はるばる山の中に来た。はん子は遊んでいたら、

「じっちゃん来た。じっちゃん来た」

まさか、来ないだろうと思っていたら、本当に来たので喜んで、

「早く俺と逃げろ」

と言って逃げようと思って相談していたら、鬼は山へ働きに行つて、そのあと、子供連れて逃げた。はん子は、

「ちよつと待って、俺、忘れ物して来た」

大便をして、大便に、もしもお父さんが、はんつて呼ばつたら『はい』と言って返事をするように教えた。三人で逃げた。

そして、鬼は山から帰つて来て、どこへ行つたと追つかけた。川を渡るのに船に乗つたら、鬼は怒つて水をカーツと飲んでむせて、(水を出したので、その勢いで)ひとりで、船が向こうに着いた。

糠野目ぬかのめの御山王様

(高島町・元和田)

上杉がまだ米沢に来ねえ、一步前はな、伊達政宗がここの殿さまだった。その当時からの話だ。それが現在でも、お宮あつからな。

御山王様が、サンノウという人だった。この人は団子屋で、旅人に団子を売っていた。昔だから、旅人は、草鞋履わらじいていった。草鞋買ったり、団子買って食ったりしていた。

ある人が、草鞋一足切れたから、草鞋履き替えしていくわけだ。ところが片一方だけしかまけねえ。片一方だけじゃしようもねえからいらねえという人もいた。

「いや、いや、お客さん、そうでねえ。草鞋というものは、履き物というものは両方いっぺんには切れねえもんだ。片一方切ったとき、こいづ役に立つこづあつから持ってください」

としてまけた。だから『一足カタガタサンノウ』といった。

そして朝早く起きて団子こさえなんねがら、粉、はたくべと思うと、ドガンドガンと粉、はたくと隣近所の耳障りになると思つて、すり鉢で擦つて粉こしゃつて、お天道さまさ後ろめたいことしねえようと、まず、いい人だったんだな。商人だからってポロ儲けするような人ではねえど。そのとき、伊達政宗が米沢にいたとき、気持ちが悪くてバタツと倒れたんだと。そして、まず死んだのよ。そして葬式の準備していただつうんだな。そしたところ、ポコツと目覚ましたというんだな。

「殿さまが目を覚ました」

とみんな騒ぐだと。すると政宗は、

「みんな、あまり騒ぐな。俺はずつと極楽さ行くべと思つて、三途の川原さ行つた。そんなとき、金棒ついた鬼がそこにおいて、

『伊達公、君は、まだ来るにや早い』

と、

『戻れ、君よりひと足早く、糠野目のサンノウという人が

先に通つことになってたんだ』  
と。

『ほだから、君は戻れ』

そして、

『サンノウという人は、いい人だから、その人に何か願い  
事があつたら、それを叶えてやれ』

と言われたんだ」

という夢を見たときみんなに話した。

そこで伊達公は米沢の殿だから、サンノウをよばって、

「何の願い事ある。何が一番に望みだ」

と聞いたところ、

「何も望みはねえ。ただ、米沢から赤湯までの道がとても、  
ヨジヨジというか、泥道というか、ひどい道だし、道のり  
も遠いし、だから米沢から赤湯までの道をもっと立派にし  
ゃってもらいてえ」

と言ぎやった。そんなときの古道が今でもあるんだ。そうい  
うわけで、今、糠野目の一本町のところに立派な御堂が建

っている。そいづは、願い事を叶えてくれる。

これは、昔話じゃなくて、近頃の話なんだが、糠野目の  
『おその塚』というところに、後藤テイサクという人が住  
んでいた。

その人が十八のとき、この、上和田さ、馬ひいで、肥料  
にする草刈りに来たもんだ。馬に乗って、朝草刈って、馬  
さついで、馬に乗ってやって来たとき、クボウという人の  
家のくね垣のところまで来た。春だから、くね垣の杉の新  
芽がちよこと出かかったときに、何だという気もなくて、  
ちよいと採って口さくわえた、というわけである。どうい  
う様子か、その、ばあーと口に入ってしまった。小僧、咳  
してもとれねえ。二日、三日そうして暮らした。

するとだんだんと身体が悪くなった。ほうして、こんだ  
悪くなって、治らんなくて、医者さかかっても分かんなく  
て、そうして、医者に、あっちからもこっちからも匙さじを投  
げられてしまった。そして、世間の人は、

「あいづは、肺病だ。治んねごで」

と、そのとき、そこに八十になるおばあちゃんがな、そいつ、御山王様さ、日参かけた。百日の日参かけたど。降つても照つてもだ。そうして、まづ人に行き会う都度、

「あのばばあ、なんぼ孫がもうせたつて、あんな肺病孫、なんぼ神様さ、手合わせだつて、わかんねえ」

どつて、言われるもんで、まだ、人の起きねえうち、願かけた。その御山王様さよ。そうしたところが、そのばあさま、夢見たんだと。

「とにかく、お前の孫は、肺痛めている。とても治らんねえ。だけでも、おれが身代わりになって助けてやっから、おれの棺を出してくれろ」

だから、神さまの棺桶出してよ、葬式出した。これは、神さまのお告げなもんだからよ。そのようにしたど。

そのときは、旧の三月だから、うんと天気の良い日に、孫は、

「縁側さ出てみてえ」

と言ったので、ばあさま、手引きして、縁側さ出てきて、

「おしっこが出る」

と言ったので、ばあさま、十八になる孫を腰たがって、小便させてやるつていうほど優しかった。

まず、縁側に日なたぼっこさせていたど。そうしたところ、何の拍子だか、咳したもんだど。そうしたところ、一寸ぐらい長い痰たんがよ、ポーンと飛び出したと。

「不思議なもんだ。一寸ぐらい長い痰たんが出たもんだ」とかき回してみたら、杉の芽が痰たんさ絡まって吹っ飛んで来たど。そして、

「俺はおばあちゃんに、そして御山王様に助けられたんだ」と言うんだ。

俺（喜代松さん）は、直接その人から聞いた話なんだ。

南の山の馬鹿むこ

(高島町・泉岡)

呼ば(食事)に招かれてつていって、数の子豆、ご(ご)ちそうにつそうになつたと。そう  
したその数の子豆うまくて、一皿食ったが、足んねえわけ  
だ。夜な、どこさ、その数の子豆しまつておくんなあとな  
で、気をつけてたんだと。そうしたれば、その戸棚の中さ、  
しまつたんだと。

夜、そーっと起きてきてたがつてよ。で、ガツガツガツ  
ガツとその数の子豆食つたんだと。そうして、今度あ、瓶かめ  
の中まで食つたんだと。そうして、瓶がかぶさつてしまつ  
たんだと。そうしたれば、瓶取れなくなつたから、竹藪たけやぶ  
さ入つて、かがんでたと。

そうしたれば、便所さ起きてきてな、そして、今みたい  
に紙なんかないから、石でぬ(拭いてきれいにする)ぐつてんだと。そして、そ  
の石投げてやったと。したらその石、竹藪の中さ入つて、  
いいあんばいに、その瓶さカーンと当たつたと。そして、

その瓶取れちゃつたと。

狐むかし

(高島町・相森あいのもり)

長手の城山というのがあつて、その下が平らになつてと  
ご、あんだよ。今、そこは田になつてけど。そして、そこ  
は昔、お堀でもあつたんだかしんねえ。

昔なあー、たての山によう、白(しろ)へぎつねと、そしてあさがわ  
山に赤(あか)へぎつねと狐といふのがいたんだと。

そうして、冬になつて、こころで雪降つて、何も食うもの  
なぐなるわけだべえ。そうすつと、たての山の白へ狐が、  
赤へ狐のとこ遊びに行つたんだと。

「何しとつたえー」

「何にも。雪降つて、寒くて退屈だから遊びさ来た」

つてよ。

「何かうまいごと、あんめがなあ」

つて二人で相談してよ、あの白へ狐がよ、

「んじゃ、俺、プンプク茶釜になつから、オメ、赤へどん、

赤へどん、茶釜持って、あさがわの寺さ、行って来たらいい

かんべえ」

と言って、

「ほんじゃら」

とかで、その白へ狐がよ、クサクサーンとひっくり返った  
らば、茶釜になったんだど。そして、そいつを大っきな

風呂敷(ふろしき)さ包んで、赤へどんがしょってよ、和尚さまのどこ  
さ、釜入れに出がげだど。

「和尚さま、和尚さま」

なんてよ。

「プンプク茶釜、買わねが」

「どおれ、見せてみる」

なんて、和尚さまもよ。

「なるほど、立派な釜だ」

なんてよ。

「ほんじゃら、ナンボで売る？」

なんてよ。

「五両なら、いかんべえ」

なんて、赤へどんも言うもんだからよ、和尚、釜を買った  
んだと。そすと、和尚さまも、

「小僧、小僧、この釜といでかけろ」

なんて言っただと。そうすつと、

「はい」

なんて、昔の小僧だからね、釜、流しき持って行って、釜  
とぎ始めたんだと。そうしたらば、

「体いってから、そつととげ、小僧っこ」

なんて、釜がよ、そうしつと、

「はあて、釜、音たてるはずねえし」

なんて思ってるよ、

「あまりいってから、そつととげ、小僧っこ」

「和尚さま、和尚さま。この釜、あまりいつてから、そつとこげ小僧っこ、なんて言わっしやる」

「そんな、馬鹿なこと、釜が言ったりしめっちゃ」

なんて和尚さまにごしよがつてよ、

「せつせと、といでかけろ」

「はい」

なんて、そいづき水汲んで持って来て、昔だから、ここさ(囲炉裏)、かぎかけで、釜かけといで、どんどん、火焚くわけだ。

釜かけて、どんどん火を焚いたらばよ。何だかチンチンなんて、むってきたんだと、釜が。たまげてるうちに、手、出したかと思うと、足出して、しっぽ出して、コケーン、コケーンなんて、戸のすぎから、逃げでってしまったんだど。狐(こ)だったんだと。和尚さまも、小僧も、はあたまげているうちに、狐、逃げでってしまったんだと。そうして、うぢき帰って来たんだと。

そうしたば、赤へどんが、一生懸命料理して、お爛かんして

待つてたっけな。

「いやいや、オレの腹の毛、みんな焼けた」

と。

「あつちち、腹の毛みな焼けど」

と言ったなんてよ。

そうして、うまいごちそうして待つていたっけもんだから、二人してごちそう食ったけど、なんて話だ。

### 和尚と小僧の話

(採話地区名不明)

雪が屋根にたまつたので、雪下ろしをやっていた。中で、和尚さんと小僧の話だと。

「小僧、小僧、御年始に来るから、おまえ達によく教えておかなきゃ。三十銭たがったときは、ペンペンと手を三つ

打つから、そのときは、お茶と酒をごちそうしろ。ただ十銭くらいがった人は、手をペンとひとつ打つから、お茶だけでいいよ。よく覚えていろよ」

「はい」

と、小僧が言った。

雪下ろしをしていた人達が、十銭たがって来て、三十銭くらいがったときくらいのごちそう食って逃げたらどうだろうと相談していた。三十銭たがわないで、十銭くらい包んで、よばって来たんだと。

そうしたら、和尚さんは、ちょっとしかたがわからないので、ペンと手をひとつ打った。そしたら、阿弥陀様がたっているの、そこでお参りして、ペンペンと手を二つ打って、三つになったんだと。

そしたら、小僧は、三つのお客さんだと思って、お茶や酒を運んだんだと。そしたら、和尚さんはけちんぼなので、わずかなお金をたがって、あんなにごちそうするとは何だべってふくれていたんだと。ちっと小僧は、顔を見たんだ

と。ぶーつとふくれて、ほっぺたふくらましているから、餅でもあぶって食わせると言っているんだとさとして、餅をどんどんあぶって食わせた。

紙よりを折っていたので、今度は、そうめんでも食わせろというのかと思って、そうめんを煮で食わせた。いよいよもって和尚さんは怒って、禿げ頭をつるりつるりと撫でた。禿げ頭を撫でたので、かーりん漬けでもごちそうするんだろうと思って、しまっておいたかーりん漬けを出して食わせた。みんな満足して帰って行った。

こぶ出しじいさん

(高島町・亀岡)

ある所にこぶ出しじいさんがふたりおったと。かたつぽが、正直じいさんで、かたつぽがいじわるじいさんだ。正

直じいさんが氏神様におこもりして、こぶが取れるように  
拝んだっていうんだな。毎日、七日七夜も拝んだべ。

ここの神様に一の宮で神様いますわな。文殊様が獅子に  
乗って、ここにお移りになったという、その獅子を祀って  
いる一の宮大明神。そして、一の宮の所にな、願かけてお  
願いたんだべ。

そうすると、どっからともなく人が集まって来たつう  
だな。何だ不思議なもんだと思って、中で黙ってその拝ん  
でいたっていうんだが、泊まっていたんだな。

そうしたところが、そのひとり曰く、

「いやいや、これはこれは、こだてのこん衛門殿。俺は、  
ごうずのこん衛門でございます」

そしたら、また来た。

「ああ、これはこれは、こだてのこん衛門殿。今夜も参り  
ました。俺は、毛利のもん吉でございます」

「ああ、これはもん吉殿、おはようございます」

また来た。今度来たのは、

「ああ、これはこれは、こだてのこん衛門殿。わどうじの  
わすけでございます」

それで、よつたり集まったわけだな。

「やあやあ、みんな、さあそんじゃあ、毎晩のように始め  
んべえ」

て、念仏踊り始めたわけだ。太鼓叩く人と、笛吹く人がい  
るわけだ。そうすと、太鼓叩いて始めたわけだ。

ドーン ドーン ドンドンドンドン

ドンドンドコドンドン ドンドンデーン

そうりよさ

ドンドンデーン

そうりよさ

ドドンコドン ドドンコドン

ドドンコ ドンコドドン

ドドンコ ドンコドドン

ドンドコデン デデンコドンドン

デندانデン デデンコドンドン

ドンデ ドンドコデン

ドンドコデンデン ドンドンデーン

ドドンドンデンドンドンデンドコデンデン

ドドンドンデンドンドンデンドコデンデン

ドンドンデン ドンドンデン

ドンドコデンデン ドンドンデン

ドンドンドロココ ドロンコデン

ドンドンドロココ ドロンコデン

ドロココデン ドロンコデン

ドンドンドーン

そして、おもしろがって、よっぴて踊ってたんだ。そう

すつと、そこにおこもりしてたじい様がいたわけだ。

「いやいやこれはすばらしい」

そのじい様も、物好きで、俺みたいであったんべ。踊り

たくてしようねえもんだ。

「今度始めたら、踊ってやんべえ」

なんて思ってたど。

「はあ、さあやれやれ」

なんて、始めたど。

ドーン ドーン ドンドンドンドン

ドンドンドコデンデン ドンドンデーン

そうりよさ

ドンドンデーン

そうりよさ

ドドンドン ドドンドン

ドドンドン ドンコデンコ

ドドンドン ドンコデンコ

ドンドコデン デデンコデンデン

デンダンデン デデンコデンデン

ドンデ ドンドコデン

ドンドコデンデン ドンドンデーン

一びき 二びき 三びき 四びき

ドンデ ドンドコデン ドンドコデン

ドンドンデーン

「いやあ、もしもし、俺もはまって五びきだー」

ドンドンドロンコドロンコドン

ドンドンドロンコドロンコドン

ドンドンドーン

「いやいや、このじい様、おもしれえじい様だ」  
なんてな。

「明日の晩もやっから来い」

なんつって、そうしてまた始めただ。

ドンドンドンドンコデン

ドンドゴデンデンドンドンデ

あー、一びき二びき三びき四びき

俺もはまって 五びきだあー

ドンドンドンドンゴデン

ドンドコデンデンドンドンデン

始めた。そして、

「はあ、今夜疲れたから、やめた、やめた」  
って、そして、

「じんつあ、じんつあ、明日の晩も来んべえ」

「なんじよ、なんじよ、来れなんで」

「いやあ、来ないだくんで、わかんねえ。何かとつとかねばなんねえ。来ないと悪いから、そのこぶ・・・」  
って言ったたら、

「いや、このこぶはとられるもんでねえ」

なんてなあ、

「だめだ、だめだ」

って、そのこぶパラッてとつてくれた。そして、家さ来て、  
はあ、

「<sup>(婆さん)</sup>ばんさ、ばんさ、ゆんべ踊り踊ったほかに、こぶとられ  
て来た」

「あー、痛かったなあ」

って言ってたと。また、隣りのじいさ来たと。そして、

「前のじいさ、なんでこぶなくて、きれいな顔してたと」

「ゆんべなあ。こういうどこさ行ってな。俺、念仏踊り踊  
ったばあ、こだてのこん衛門とこづのこん衛門なんか来

て、俺のこぶ、明日の晩げ来いなんて、とられちゃった」  
って言ったんだ。

「それじゃ、俺も今夜行って、そのとってもらって来るか  
ら」

って、

「あー」

言ったってその人が。そして拝ましてただ。

そしたら、また来たど。ごうずのこん衛門、どうじのわ  
すけ、毛利のもん吉、こだてのこん衛門、寄った。

「さあさ、始めんべか、始めんべかな。じいつあ来ないな、  
こりや」

「いいから始めよう」

始めたんだ。

ドーンドーン ドンドンドンドン

ドンドンドンドン

ドンドコデندنデデン デンデ

そいやさ、ドンドンドン

それやさ、ドドンコデン

ドドンコドン ドドンコドンドンドン

ドドンゴドンドンドン

ドドンゴデレンゴドンドン

ドドンゴデン デレンゴドンドン

ドンドンドンゴデン

ドンドコドンドンドンドンデ

ドンドンドンゴデンドコドンドン

ドンドン デンデンデン

デゴドンドン ドンドンデドンドンデ

ドンドゴドンドンドンデ

ドンドンドロンドロンゴドン

ドンドンドロンドロンゴドン

ドロンドゴン ドロンコドンドンゴ

ドンドンドーン

そしては、また

ドーン ドーン ドンドンドン

ドンドンドンドン ドゴドンドンデン

それやき、はあ

ドンコドン

あー、一びき二びき三びき四びき

って始めただ。

あー、俺もはまって、五びきだあー。

ドンドンドンドンデン

ドンドゴドンドンデン

「なんだ、このじ(爺様)つ様。夕べのじつ様より、おもしろくないじつ様来たもんだなあ」

って、言ったんだ。そして、

「はあ、やめろ、やめろ、みんな。こんなじつ様さま、明

日の晩も来っことない。夕べの預かったこぶ、やれ」

サアとこぶさ、くっ付けた。

「いらねえー。俺のこぶとってける」  
って。

「だめだ、だめだ。来っことねえ」

って、じつ様さま、ワァーンて泣いていたって。

ば(婆様)様に語ってやるけど、正直のこぶに、神に宿って行って、いじわるじい様、バチ当たるってことを表現したものだべな。

おいとからいと

(高島町・佐沢)

職人だったな、お父さんがな。お母さんは早く亡くなつて、後妻をもらっただ。後妻は子ども一人いた。先妻の子どもいたんだ。『おいと』ってというのが、先妻の子どもで、『からいと』というのが、後妻の子どもだった。後妻だから、後妻の子かわいがって、先妻のおいとっていうのを、邪魔にしたんだ。お父さんがいると、大事にするけど、お父さんは職人だから、泊まったりするんだな。お父さんがいな

い間、いじめられちゃうわけだ。

そのうちに、お父さんのいない間、ママ母は姉を殺そうとするんだ。そして決心して、死体が入る棺を大工さんにこさえてもらった。そしてその、さとしたもんだから、くらいとが大工さんに、手が入るくらいに穴をあけてくれた。姉妹はふたり仲悪くなかったんだ。いよいよその棺さつめられたんだけど、妹が、

「あねさん、あねさん。けしの花の種、袋さ詰めて入れとくから、これを川さ流すわけだが、川さドンと当たったら、手を出してけしの花撒いておけ。花が咲く頃、私があねさんの所に種を頼りに行くから」

そんで約束して、姉のおいとは、泣き泣きつめてもらって、かかにくぎ打たれて、出れないべし。そして夜中に、川に流してやっただ。

そうすつと、川流れて行った。どこかのお母さんが、洗濯してたんだな。そうすつと、そのお母さんが、死体の箱みたいの流れて来たから、竿でその箱をこつちによこして

拾ったわけだ。

知らず開けてみると、きれいな娘さんが入っているわけだ。きれいで、賢そうな娘であったと。それで、そのお母さんの家が、すばらしい財閥だったと。子どもいなかったと。それで、その娘連れて来て、お父さんと相談したわけだ。箱が流れて来たから拾ったら、子どもが入っていたと。風呂炊いて、きれいに洗ってくれたって。

そうすつと、お父さんとお母さんが、私たち子どもいながら、この子を養子に育てたらしいって。そういうふうになら、立派な着物着て、立派に育てたと。

そんで今度は、その妹が、けしの種撒いたの咲いた頃だからって、後妻に黙って、焼き飯しよって、川ぶち、けしの花咲いてるの、簡単に川を下っただ。

そしたら橋があったとな。橋まではあっちこつち花が咲いていたけど、橋からむこう、花がなかっただ。ここらであねさが拾われたかもしれないと、橋のたもとに家十軒くらいあったもんだから、一軒一軒、聞いて歩ったんだな。

そうすつと、立派な家で、庭でまりつきしていた娘がい  
やつたと。立ち止まってみたら、きれいだけど、顔があね  
さんそっくりだと。それで、近寄ってみたら、やつぱりあ  
ねさんだ。

「あねさん、おいとあねさんか」

「そっだ」

と、それで、姉妹だもんだから、うれし涙で立っていたと  
ころが、家の人に見られたと。あねさん、お母さんに生ま  
れを語つたと。けしの種撒いて、けしの花咲いた頃たどつ  
て来て、私たち姉妹だと。それで、その家、ふたりを大事  
にして育てただ。

こんだ話かわつて、家のことだ。お父さんが、家に帰つ  
たところが、誰もいない。お母さんひとりしかないない。

「子どもなした」

つて子どももないもんだから、そしたら、お母さんが、

「上の子は、悪いことばっかりするから、どうなったか、  
わかんねえ。家出て行った」

「なら、妹はどうした」

「妹も悪いことした」

つて。お父さんがっかりして、力落として、三日四日物も  
食わねえで、毎日毎日泣いてたと。そして、とうとう、ま  
なこ、つぶれて座頭になったと。それで、毎日泣いてもし  
ようがないから、

「明日から、おいとからいと探しに行く」

つて、焼き飯しよつて、棒ついて、旅に出たわけだ。座頭  
が、棒ついて、

「おいとからいと、いたならば、この目ばつちりあくべぞ  
よ」

つて語つたら、お父さんは見えないけれど、子どもは、

「なんだ、きたない乞食がいた」

つと、そばに行つたら、お父さんだったとな。そうすつと、

おいとからいとが、

「お父さんでねえか」

「おいとからいと、だか」

「そうだ」

そしたら、お父さんの目、ぱっちりあいたと。それで、家に行って、お父さんとお母さんに、

「こういうわけで、俺たち心配して、お父さんは、泣いて座頭になって、そして耐えてきたんだと」

と話したんだと。おいとからいとに大事にされて、お父さんは幸福に暮らしたと。

そうすると、こんだ、うちのお母さんはひとりになったと。稼ぎ手がないもんだから、乞食になったんだな。乞食になって、歩いてた。子どもは、乞食だもんで、驚いたと。

それでも、お母さんを許さず、一緒に暮らさず、三人で暮らしたと。そして、心がけの悪い後妻は乞食で暮らしたと。

あとの人は、幸福に暮らしたと。

どんびんさんすけ、さるまなぐ、

さるのまなぐさ毛がはえて、

けんけん毛抜きで抜いたらば、

まんまん、真っ赤な血ができた

(終わり)

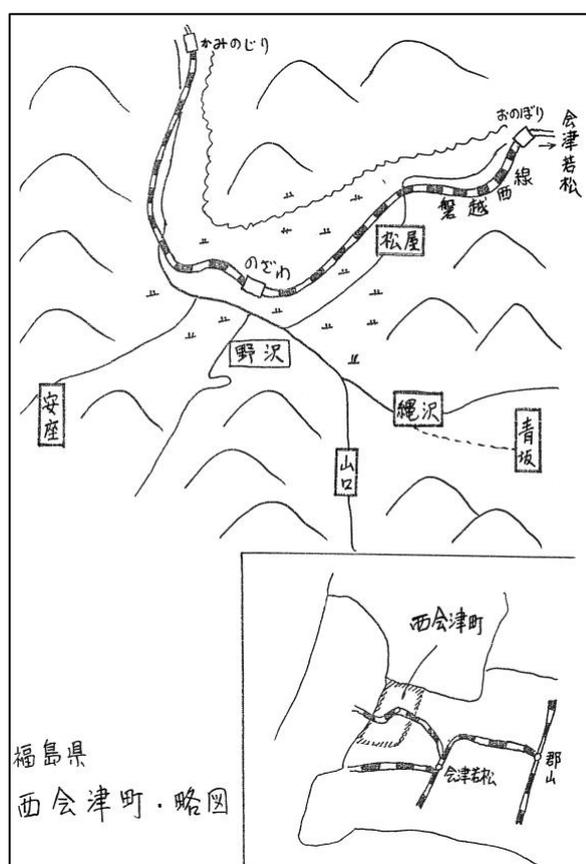
## 西会津町の概要

西会津町は福島県耶麻郡やまに属し、西側は新潟県と接している。町の中央には阿賀川が流れ、この川を挟んで南北に細長い町である。また、冬には雪が一メートルも積もるという豪雪地帯である。

部落数は九一で、戸数四戸のものから二三九戸のものまでさまざまである。人口は約一三二〇〇人である。町には大山祇神社おおよまづみ、如法寺によほう鳥追観音、伊豆ヶ原の観音堂など、重要文化財が多くあり、大山祇神社では、毎年六月に大山祭りが行われ、隣りの新潟県からも多くの信者がやって来る。

町の北部にある弥平四郎部落は、木地師の部落であり、その他に、昔、会津藩の島流しであった極入、弘法大師の岩がある安座などがあり、また、部落間で結婚しないという風習も、昔はかなりあったようである（これらにまつわる話も多くあった）。

生業は、主に農業で、たばこ、米、ホップを作っている。



また、ほとんどの家では、会津桐を植えており、養蚕をしているところもある。

西会津町の上野尻かみのじりには弥生期の遺跡がある。九世紀半頃、耶麻郡大領丈部人麻呂の戸に、姓上毛野陸奥公を賜り、八〇十世紀頃、耶麻郡が会津郡から独立した。

その後、十六世紀には、蘆名感興が耶麻郡に徳政令をしき、十八世紀には、耶麻郡猪苗代の本百姓が数年にわたる

過酷な年貢取り立ての遺恨をはらそうと蜂起したりした。

二十世紀初めには、耶麻郡加納鉦山の煙毒に対し、地元農民が立ち上がったたり、磐梯高田商会製錬所の焙焼夫や大寺村の東北電気化学会社の職工がストライキを計画したりした。そして一九五四年に野沢町と尾野本、登世島、睦会下谷、群岡、上野尻、宝坂、新郷、奥川の九村が合併して西会津町となり、所属を耶麻郡として現在にいたっている。

## 【西会津町の民話】

首塚・胴塚・足塚

(西会津町・松尾)

昔、『綱沢』ということ『松尾』のこの境界の沢げで、境界の争いがあった。あそこの公民館のところに清左衛門という人の屋敷があつて、その人が松尾から行って、綱沢からも一人行って、代官様だか何だか山の境界さ調べに行つたんだ。ここから一里ばかり奥だ。

なにぶんにも綱沢の人は(松尾側を)負けらかしたいと思つていたもんで、御上に杖で指して教えた松尾の清左衛門を見て、

「なんだ、ご無礼な。御上に足(杖)をもつて案内すつとは」

つて言つたんだ。

そこから、境界を決めるのに『鉄火の勝負』といって、

鍬をまつ赤に焼いて、それをたがって（手に持って）熱くなければ勝ちという、そういう汚いことをやったんだなあ。

そのとき、御上は松尾の人には熱く焼けた鍬を持たせて、綱沢の人には焼けたような色をつけた鍬をやった。そいだから、松尾の者は負けてしまった。

とうとう、その人は殺されてしまって、足と胴と首に切られちまって、山ん中さ、埋められちまった。山の上の方から、足、胴、首とさかさまに埋められたんだ。そいで、足塚・胴塚・首塚といって、今でも残っているんだ。

そのことがあったもんで、この松尾と綱沢とは、縁組みはしなくなつて、今も、しませんよ。

## 鉄火の裁き

（西会津町・綱沢）

山林の境界問題で両村が争つたんですよ。代官に言つてもはつきりした境界が分からなかつたんで、綱沢と松尾部落の言い分をどっちも書き上げておいて、そして無理なことをしたんですよ。

この野沢の入り口に『すわ神社』というのがありますが、ね。そこへ部落の役職が集まつて『鉄火の裁き』といって、鍬を焼いて白紙の一枚の上に乗せて、神社に供えさせたんだと。

ところが、松尾の親方の長谷川清左衛門とかいう人は、白紙一枚の上に乗つ赤な鍬あげられちやたまないからつて落としちまった。ここの部落の代表は十六才の青地十衛門とかいう人で、この人の母親が偉い人でね、

「おまえは、例え死んでもこの村を守んなければならぬ責任があんだ。そいだから、かたわになつても、しつかり

お役を果たせ」

って、教えらった。

それだから、両手みな燃えちやっただが、綱沢の言いが通ったわけなんだ。

猿むかし

(西会津町・山口)

あるところに娘三人持った人がいたんだと。そのうちで、田さ水がかかなくて、なんともしようねかったんだと。親切な猿がいてよ。そしたら、その親はこう言っただと。

「俺、三人持ってっけんじよも、ひとりどれか猿の嫁にくれっから水かけてくれねか」

と、そう言ったんだと。そしたらその猿がな、

「おいきたよし。そんじやらば、俺、水かけてやっから、

どれか娘くつてくんちえ」

と、こうなつたんだと。

そしたば、一番おつきい娘に、

「なんとかして親孝行して猿の嫁になつてくろ」

つてそう言つたれば、おつきい娘は、

「おら、やんだ」

と、こう言つたんだと。そして、今度は二番目の娘に、

「なんとか親の言うことをきいてくろ」

つてそう言つたら、その二番目娘も

「やんだ」

と、言つただと。そしたら三番目娘が、

「みんなが言うこと、きかねえでいらんねえ。そんだば、

俺、猿の嫁に行くから、どんどんと水かけてもらいてえ」

と、こう言つて、猿がどんどんと水かけて、そし

て今度は、田、一面に水たっぷりとかけてもらったと。そ

して、一番末の娘が猿のうちに嫁に行くことになつたんだ

と。

そしたら三月の節句になったんだと。したら、

「今月は節句でもあるし、餅ついてそして礼に行かんねえから、したから、餅ついて、しよって行かんねえ」と、娘がそう言ったんだと。

「おらの親だちは臼に入った餅が好きだから、臼もでら、しよって歩いてくんつえ」

と、猿んこと頼んだんだと。したら、その猿が、

「おいきた」

言うて、

「おまえの言うことは、何でもきくから、そいじゃ、いい餅ついて、臼もでら、しよって行こう」

臼もでら、今度は餅入ったかな、とてもな重くて、何ほど目方があるがなあ、猿はその臼しよって、そして今度は出かけたんだと。

したら川端に桜花が、山桜が満開に咲いていたんだと。したら、

「俺の親たちは、とても桜花好きだ」

って嫁さんが言っただと。したら、

「そうか、そんじやらばな、これ、臼降ろして、俺、上がって桜を取って、そしてそれ持って行くから」と言ったんだと。したらその嫁さんが、

「こいさ降ろしておくと、土臭えと親が言うから、土さ降ろさねえで、しよって登ってらっしゃえ」  
て言っただと。

「ああそうか、おめえの言うことは、何でもきくから」  
って言うて、臼しよったまま桜の木さ登ったんだと。

「どの枝いい」  
って猿が聞くだと。嫁さんが下にいて

「ああ、その枝ぶりにいいけんじよ、まあちつと上の枝いいなあ」

「こいいいか」  
と言うと、

「まあちつと上の方、いいな」  
って言ったと。してこんだ、

「この枝いいか」

って、

「それがとてもよく咲いているから、その枝いいなあ」

って言ううちに、こんだ、ワリワリワリって、その枝細いから、臼しよってつから目方はあんべし。臼しよったまま、猿が川さ高いとつから下の川さ、ドドンとまぐって落ちて、そいで流って行っただと。したら、

猿沢川に

落ちる命は

惜しくない

後に残りしあと

姫かわい

って、猿はザンブザンブ、ザンブザンブって流れてって行ってしまったんだと。

ざつとむかし、終わり。

機織り滝

(西会津町・青坂)

大畑部落の向かいにある滝（今はない）の話で、昔、も  
の覚えの悪い嫁がいて、姑がいくら教えても、機織りをな  
かなか覚えないので、その滝に突き落としてしまった。  
そばを通ると、機織る音が聞こえてくる。それで機織り  
滝と名をつけた。

猫檀家

(西会津町・網沢)

津川の『ニコウ寺』というお寺のお話ですがね。これは  
猫をかわいがって何よりも大事にしていた人がいたんだな。  
ところが猫ばかりかわいがっていて貧乏になって、どうに

もしようがなくなった。とうとう、猫にご飯あげること  
できなくなつて、寝る頃に、

「おまえにご飯をやるようになつた」

と言つたとき、その猫が人間の言葉で、

「恩返しすつから。これから何日先に葬式があつから、そ  
のお棺を法でもつて巻き上げつから、俺が。そのとき、お  
まえが来て拝めば、その棺を降ろす。他の坊さんが拝んだ  
つて、俺は降ろさないから。拝む方法は『トラや降りなぞ』  
と言えがいいから」

つて言つて、その猫は消えちまつた。

その人が、何日かたつて大尽だいじん（金持ち）の家の葬式さ行  
つたんだと。ところがその大尽のお葬式のときに、一転に  
わかにかき曇つて、お棺がズーツと空の上にあがつちまつ  
たんだ。さあ、大騒ぎになつて、坊さんもあつちこつちか  
ら呼んで来て、お経あげてもらつたんだが、そのお棺、降  
りてこない。空高く舞い上がつて。

そんなときに、乞食みたいな姿で、その人がやつて来て、

「トラや降りなぞ、トラや降りなぞ、トラや降りなぞ」

三回言つと、ズーツ、ズーツとのお棺が降りてきたと。

そのおかげでもつて、その大尽の家から、八町ぐらいの  
土地をもらつて、お寺を建ててもらつて、そこのお寺の住  
職になつたんだと。そのお寺が今でもあるわけだ。

#### 狐の証文

（西会津町・網沢）

ここのお寺（興国寺）に、昔とても利口な小僧がいて、  
なんとか狐に騙されない方法はないかと思つていた。村の  
人が毎晩狐に騙されていたんだ。

ある晩、小僧が和尚さんを迎えに行く真似をして、呼び  
に行つたと。

「和尚さーん、和尚さーん」

つて。そうしたとき、山から、

「あーい」

つて言つて、和尚さんの格好して狐が化けて出てきたと。

「こんなに遅く、和尚さんどこ行つてただ。部落の人、みんな心配してつから」

つて小僧さん言つたら、

「急な用事ができて遅くなつたんだ」  
つて。

「和尚さん、疲れっているようだから」

つて、おぶつて村さ連れて来た。途中まで来て、

「おしっこ出てえから、降りてえなあ」

つて、和尚さんに化けた狐が言つから、

「もうちよつとで着くから我慢して」

つて言つても、

「いや降りる、降りる」

つてきかないんだ。すると、小僧は持っていたすり鉢を頭さ被った。狐に後ろから頭さ、かつきやぐらつちえ困るか

ら用意しといただなあ。帯でしつかりおぶさつちえから、降りようにも降りらんねえ。

村まで来つと、小僧は、

「おい、おまん狐<sup>ぎのね</sup>。おまえが和尚さんに化けてんの知つてただから。これから、おまえを村の者みんなで火あぶりにすつからな」

つて言つてたら、きつねはどうとう、

「もう悪いことすつことねえから。悪さしねえから」と、謝るけれど、

「口で言っただけではだめだ。証拠になるよう証文を書け」  
つちゆうことで、その狐は、『もう、ここの部落の人を騙<sup>だま</sup>したりして悪さすることはいたしません』ちゆう証文を書かさつちやちゆうだ。

最近まで、その証文が残っていたらしいけどな。

それから、綱沢の人は化かされることないだ。

三匹の有名な狐

(西会津町・小綱木)

花立てお七<sup>ひち</sup>・・・西光寺のある山の峠に住んでいた。

切船沢太郎・・・切船沢(きつぺざわ)という所にいた。

深沢おまん・・・大船沢の深沢という所にいた。

鬼ばばと和尚さま

(西会津町・青坂)

ある奥山に、和尚さまと小僧が住んでいた。和尚がな、

「<sup>小僧</sup>こんぞ、こんぞ、おれの言うこと良く聞いてくんねえか」

と言ったどー。

「はい、聞きます。何か御用で言うのですかと、和尚さまが聞いたどー。

「あのな、この奥山になあ、向こうの隣り村に家があるから、そこへ行って、お札<sup>ふだ</sup>を買ってくれないかと頼まれたどー。

「行く途中にな、昔あそこには鬼ばばというのがいてらったどー。それさな、けんかしねえように気いつけて行ってくつだどー」

と和尚さまに言わったど。

「はい」

と言ったところが、テツテツテツと奥山に駆けて用足しに行った。今度、用足して帰って来るやいなや、真っ暗になっちゃったんだな。

「はて、こんな暗くなるはずがない」

今度はもう一目散に一生懸命に駆けても駆けても、どこを駆けても山だらけで、もう、そのお寺さえ行かれないだ

と。

「はて、困ったな」

と違って、そんなでも、まあ向こうに明かりが見えんだけども、いくらとんでもとんでも、お寺さまさ、行かれないっというんだな。

「はて、困ったな」

と違って、矢先に、明かりが見えるから、何ともしようがないと思って入ったところ、お寺ではなかったと。

「ああ、困ったな」

と違って、

「こんばんは、こんばんは」

と小僧が入ったと。

「はい」

と中から出て来たところが、大きな、こんな、髪バサバサした鬼ばばであったと。

「はー、おっかねなー。こんなのに食わったら、どうすんべなあー」

つて小僧が泣いたと。鬼ばばが、

「こんぞ、何そんなに震えてるだー」

と言ったと。

「何だか知らねえけんども、こーう震えてしようねえだ」と小僧が言ったと。

見たところが、口が耳まで裂けた鬼ばばであったと。それに食われたら、どうすんべと思って小僧が泣いたと。それで今度は、

「暗くなったから、泊めてくなんしよ」

と入ったところが、おっかねえから、今度はとても寝ても起きてもらえねえから、

「ばあさん、ばあさん」

と言ったと、小僧が。

「何だ、腹減ったのか」

「そんねえだ」

「何だ」

「ばっこ、出てえだ」

とそう言っただ。

「そうかそうか、ほんじはな、ばば出てえんでば、何とも  
そうやっておくことできねえ。ほんじはここだから、ばっ  
こやき、行げ」

と、行くつと逃げらちまうと思って、こんぞとこさ繩  
をいっつけて、鬼ばんばがこんぞ見張ってただど。

「こんぞ、こんぞ、まだか」  
つて言ったところが、

「まんだ、まんだ」  
とこんぞが言っただど。

「こんぞ、こんぞ、まだか」  
「まんだ、まんだ」

つて言うだど。

「なんつう長げえ糞たれだべな」  
と思つて、鬼ばばが気持ちがいらいらしたど。

「こんぞ、こんぞ、まだか」  
と言つたところが、

「まんだ、まんだ」

と言うだど。三べんもそう言っただ。

「いやいや、こんな長げえ糞つたれ、聞いたことも見た  
こともねえ」

つてわけで、

「うーん、いまいましい」

つて、ぐーんと引っぱっただど、その繩を。したらば、こ  
んだ、便所の金隠きんかくしがメリメリメリと吹つ飛んでむしれ  
てきちまっただど。こんぞだと思つたら金隠であった。小  
僧が今度逃げただど。その金隠に繩くっつけて、タツタツ  
タツタツと逃げて行つただど。

鬼ばば、

「ほんじは、小僧に逃げらつたな」

と、今度、鬼ばば一目散に駆けて行つて、小僧こと追つか  
けんべと思つて、タツタツタツタツと行つただど。今度は  
鬼ばばが、

「こんぞー、待て」

小僧が、

「来た、来た」

と、タッタッタッタと、手があがってんだか足があがってんだか分かんねえくらい一生懸命とんだと。まあ、とにかく、死に物狂いでとんだそうだな、小僧が。

「こんぞー、待てー」

鬼ばばがとんだそうだな。そのときに、和尚さまに買って来いよと言われたお札三枚持っておっただと。はっと思いつ出したところが、

「針の山となり、火となり、川になれと言って撒まけよ」

と言われたのを思い出した。すぐ後ろさ、鬼ばばが追っかけて来るから、

「川になれ」

って札撒いたら、川になっただと。

なんぼとんでもとんでもまだ追っかけて来くつから、今度は、また命食われてしまうと思つて、一生懸命とんだだと。

和尚さまに聞いたけど、何を今度は出ろつて言いながら札

をふれつて言っただと思つたら、あ、そうだ、火になれだと思つて、

「火になれー」

って札撒いたら、火になっただと。また一生懸命駆けつけた、また追っかけて来るから今度は、

「針の山になれー」

と撒かせらつたど。そしたら針になったと。その針の山も越えて来たと、その鬼ばばは。

そして今度はとうとう、お寺の前まで駆けて来て、今度は小僧が、

「和尚さん、和尚さん、はやくはやく、戸開けてくんつえ」

和尚さまがなかなか出て来ない。

「待て待て、帯をして」

なんて言ったと。

「和尚さん、はやくはやく」

「待て待て、それから下駄を履いて」

「和尚さんはやく、鬼ばばが追っかけて来んぞ。」

命食わってしまうぞ」

「待て待て、これから錠前はずして」  
なんてなかなか出て来ないだと。

「やー、鬼ばばに食わっちまう」  
と小僧が言っただと。それから、

「なんだ」

とガラツと開いたところが、小僧が飛び込んで和尚さんに  
すがりついた。

「何だ、何だ」

「いやいや、とてもとても、口が耳まで割れた鬼ばばに、  
今襲われてしまった。はやく隠してくっつえ」

「ほんじはな、二階の長持の中さ入れよ」

と長持の中さ入れたと。鬼ばばが追って来たそうだな。

「和尚さん和尚さん、ここさ小僧入って来なかったか」

「いや、こんぞなの、入って来ねど」

と言ったそうだと。

「なんだ、こんぞの匂いがあるようだな」

って鬼ばばが言ってたそうだと。

「いや、どこにも、こんぞなの、いねえから、どこでも調  
べてみたがいい」

なんて、和尚さまが言ったそうだと。鬼ばばが今度二階から、  
みな長持あたりから、みな入って匂いかんだだど。長持の  
そばまで来たら、何だか、ポリポリチリチリポリポリって  
いうような音がすんだと。そのときに小僧が、和尚さまに  
豆をもらって、中さ入ってて豆をかんでだど。

「豆をかんでいくと、鬼ばばっていうのは、チリチリ虫が  
嫌いだから、帰って行くから、そいでな、そのときに豆を  
かじれよ」

って言われたから、長持さ入って豆をかじってたと。カリ  
カリコリツてかじっていたところが、鬼ばばは、

「何だか匂いがすつけど、チリチリ虫しや鳴くな」

「ああ、チリチリ虫しや鳴くだ」

なんて和尚さまが言ったそうだと。

それで今度、鬼ばばはチリチリ虫の声で逃げて行ったそ

うだ。小僧、ようやく命が助かっただと。

ざつと昔さけたって話だど。

### 鬼んばの話

(西会津町・弥平四郎)

昔々あるところに、夫婦で子ども三人持って山の方で暮らしていたんだそうだ。おやじさんは猟師で、魚を捕ったり熊を捕ったり、いろんな仕事に従事してその日暮らしをしていたと。お母さんは畑で粟あわだの稗ひえだの、そのころ野菜などはあまりなかったろうから山菜などで、子どものまかないをしていたと。

ある日のこと、お父さんが猟に出て、そして暗くなっても帰って来ないので、お母さんが夕方迎えに出ただけど、それも帰って来ない。お父さんは行方不明になって、とう

とう見えなくなってしまうた。お母さんも乳飲み子をおぶって迎えに出たまま帰って来ない。

子どもは太郎、次郎、三郎といたが、その上のふたりで、いくら待っても帰って来ない。どうしたらいいだろう。泣きながら寢床で臥せていたところが、夜中にドンドンと表の戸を叩く者がいるから、太郎が、

「お母さん来たじゃ。行ってみなきゃなあ」と表出てみて、

「お母さんか」

「ああ、そうだ」

「声が違うな」

「いや、お母さんだ。戸を開けろ」

表の方で言うから、しかし、お母さんの声ではないから、どうしても開けられない。開けろ、開けないと押し問答して、その戸の隙間から手をそつと中へ入れたと。その手を触ってみたら、毛がもしやもしや生えていて、人間の手のようではない。ますます、子どもらは恐ろしくなって、

「お母さんではない。お母さんはそんな毛の生ている手ではないんだ。つるつるした手なんだ」

子どもだから、そう言ってやったら、

「そうか」

って、また戻って行って、しばらく二時間くらい過ぎたら、また、ドンドンと戸を叩く。子どもらは恐ろしさにあまり、眠んねえでいたと。だから、戸を叩くから、また出てみた。

「お母さんか」

「お母さんだ。戸を開ける」

手を出してみると言ったら、戸の隙間から入れたところが、つるつるしているから、お母さんだと思って、入れたところがお母さんではなかった。その指には、里芋の葉を巻いて、ごまかしてやって来たわけだ。そして、

「はあ、おまえたちも辛かったろう。お母さんが帰って来なくて」

太郎も、お母さんではないんだけれども、お母さんらしくしているから、我慢して寝たところが、プリンプリンて

何か食っているんだ。次郎は少し兄貴よりも頭の方はよかつたんだろうが、

「お母さん、その食べてんの次郎にもくれ」

そしてくれたところが、赤子の指であったと。そうすると、

「赤子の指では、こりや食えないから、確かにお母さんはこれに殺されたんだと。弟はこの指に相違ない」

そして、弟は今度、(兄と)相談して、お母さんに化けた鬼んばが、スコンスコンといい気持ちで寝ている間に、弟と兄貴は相談して、

「確かに、これは弟の指に相違ないんだ。だからここにいちや、我々も食われてしまうから、兄貴どうする」

「いや、お母さんだから」

兄貴は少し頭の方が悪かったから、

「どうしても、お母さんだから」

「いや、そうでない。こんな人間の子どもの指食ってるお母さんがいるか。はやくここを逃げ出さないと困こまんだ。逃

げ出そうじゃないか」

と相談決まって、その鬼んばの方を見ると、鬼んばは安心しきって、いびきをかいてゴロンスタゴロンスタ寝ていたと。そして兄弟ふたりは何とか寝ている間に逃げ出せば助かるだろうと、どンドン、どンドン逃げ出して行って、二里くらい行ったところに大きなお寺があった。そのお寺に逃げ込んで、戸を開けて、

「助けてくれ」

坊さんが、

「何だ、暗いうちに何事で来たのか」

と言って、一部始終を話していたところが、そのお寺の住職は、

「おまえたち、ここにいれば我々まで食われてしまうから、どっかいいところあったら隠れなさい」

と聞かせらったので、弟は、昔鉤かぎがあったんだが、そういう鉤を借りて、

「あの大きな池のどこの柿の木へ上がろう。あそこの上だ

ったら、鬼んばもわかんねえだろう。だから、兄さん早くあがれ」

と、ふたりは鉤ひっかけてあがつて夜明けんの待っていたら、髪を乱した鬼んばが一生懸命追いかけて来たつてもんで、木の上で、ふたりで声もたてずに隠れていたところが、

「ああ、喉乾いた。水でも飲もう」

と、この池のところに顔を入れたら、二人の顔が、その水鏡に映っていたと。

「あれ、水の中に入っているわけではない。木が生えているから、この木だろう」

そしたら、ふたりは固まっていた。そしたら、その鬼んばのやろうが、

「こらこら、どうしてそこへ上がった」

「お寺から鉤借りて来て、そして木の股へ引っ掛けて、ここまで上がった」

と、兄の方は正直に言ってしまった。

「そうか」

と。弟の方は、氣いいもんで、

「どうしてそんなこと教えたんだ。我々は食われてしまうから、はやく逃げなくてはなんねえ。もつと上へ上がろう」と言っつて、また枝から枝へ、木登りをしていったら、鬼んば、お寺から鉤を借りて来て上がつて来た。

そのときに、弟の方は、どうか助けてくれと、一心に神を信じたところが、鬼んばに足を押さえられるようになり、もう危機一髪のところまで追い詰められたときに、上から鎖がザーツと、ふたりの前に下がってきたんだそうさ。

「太い鎖だから、ふたりでつかまっても、何とかなるだろう」

と言っつて、助けの神だと思っつてふたりつかまったら、その鎖はだんだん、だんだん上の方へ引き上げられて鬼んばと遠くなつてしまった。鬼んばも、

「おお悔しい。ここまで追い詰めて、あの野郎ども食わねえでは、いらねえ」

と独り言を言いながら、やつていたところが、その子どもらの鎖はだんだん、だんだん雲かすみと上へ上へ上がつて行く。それから隣りの手の届くところに、もう一本の鎖が下がつてきた。ああ、これは天の助けだと、鬼んばがそれにつかまつたと。だんだん、だんだん引き上げられて、上の方へ行つたんだと。そして、高い高い雲の近くまで行つたときに、鎖がプツンと切れて、鬼んばは、鎖もろともその池の中にドボンと落ちたまま、浮かんで来なかつた。そして、子どもは無事助かつて、お月様になつたんだと。昔、おばあさんに教えらつた。

スズメと甘酒の話

(採話地区名不明)

スズメが、木の枝の穴のところへ、米集めてただつて。

そんなうちに、雨降って、穴に水が溜まった。そこで、その周りで、スズメは歌さ歌った。何だと思って見たら、甘酒が出来た。

みようたらてん

(西会津町・真ヶ沢)

新潟の弥彦に丈夫な母親と、孝行な息子がいた。その弥彦には、みようたらてんという鬼婆がいた。そして悪いこととして、悪いこととして、いじめたり、人を捕ったりして、夏でも雪を降らせたりしたという、みようたらてんの鬼婆がいた。

息子は毎日、薪を積んで町き売りに行って、親子で暮らしていた。そして孝行して、母親を大切に、そうしていたら町から帰るべえと弥彦の村はずれさ行ったら、竹林

があるんだと。その竹林にみすぼらしいお婆あさんが立つてたらしいんだなあ。そして、自分の母親と同じようなお婆あさんだつて、しとしと、しとしと雨降りなので、気の毒で、

「お婆あさん、馬に乗りなさい」

つて言つて、自分の笠から蓑から脱いで、そして着せて、望みの村はずれさ来たらしいんだ。

「ここで降ろしてもらいてえ」

つて、降ろしてもらったんだと。そのお婆あさんは。

ところが、人がみようたらてんと呼ぶ鬼婆であつたけれども、

「あなたを食べべえと思つたけれども、あなたの孝心には私も恐れ入つて食べることもできねえ」と。

「あなたに恩返しすつから」

あなたに嫁を授けるつうわけだな。そして今度、お婆あさんは山さ登つてつちまつたらしいんだな。

ところが、いついく日には、大阪のいいところから嫁が他  
さ行くんだが、あなたのとこさ授けっからっつうわけで言  
ったんだと。いついく日には大雨が降るから、そのとき連  
れて来るからっつうわけだ。だから、そのときは酒か何か  
ちつと用意しておいてと言って、その鬼婆は行っちゃった  
んだと。

そんでいついつかの雨の日だったんだか、親子でまあ肴  
を嘘だか何だか分かんねけど、用意しとくべ。しとしと、  
しとしと雨が降ってきて、大雨になり、大雷雨になったん  
だと。十二時ころになると、ドシンと音がして、家の前  
さ何か落ちたんだと。そして行ってみたら、大きな長持み  
てえな箱が落ちていたんだと。そこさ開けてみたら、それ  
がお姫さまであったんだと。そして、お姫さまなんて立派  
などこ嫁に行くんだから、持参金持って来たわけだ。もし  
て仕方ねえから、家さ入ってもらって、いろいろの話聞い  
たら、

「私は、鴻ノ池にお嫁に行くわけだった」

って言った。

「それでは、明日、大阪行きの舟があるから乗って帰ろう」  
と言うと、お嫁さんは、

「いやいや、私はここさ授かったんだから置いてもらいて  
え」

って言うわけであ。

「貧乏で、食うや食わずの家だから帰ってもらいてえ」  
って言うと、

「いや、縁があつて来たんだから」

って。さあ、貧乏の家さ、お姫さまが来たってわけだ。と  
てもひでえあばら家なので、親子で困ったつうわけだ。

そして今度、町の方さ家さ探しに出たところが、いい家  
がねえ。ただ、角屋敷に一軒の化け物屋敷があるんだって。  
そして、何とも仕方ねえから、そこさ三人で入るより他ね  
えと、親子で相談して、そこさ入ろうとその家を借りたん  
だと。ところが親子は化け物屋敷と知ってるから、親子で  
出でしまったんだと。

ところが、そのお姫さまは、家柄の娘だから、親も主人も帰って来ねえとこさ寝らんねえと。夜中までちゃんと待ってたらしいんだな。ところが、奥の座敷の方からストーンストーンという音がするんだと。そして、お姫さまのこさ近づいて来たつつうんだな。そして、お姫さまが、

「あなたは、どなたでございますか」と聞いたら、

「私は金神<sup>かながみ</sup>で、床の間さ大きな甕<sup>かめ</sup>が二つある。この甕を、私はみんなに知らせて世の中に通用させてもらいたいと思うけれども、私は化け物だと言われ、通用されないで床の間の下にあるのだから、あなたに床の下掘って世の中さ、出してもらいたい」と言う。

そして夜明けになって、もう化け物にでも食われてしまったべと、親子が戻る。ところが、ちゃんとしているので驚いてしまった。こういうわけで金神さまが来て、床の下に埋まってるから、通用させてもらいたいと言って、消え

てしまわれたって言った。それからこんだ、掘ってみたら、山吹色になったた。

そして財産家になって、三年か七年か経って、お嫁さんが家に帰ってみると、和尚さま、たくさんいて、お法事だったんだと。そして娘が法事で帰って来て、それがお祝儀になって、また帰って来て暮らした。

孝行したおかげで、安楽になった。そして、お母さんの墓は『のぞみ』という山にある。

#### 豆まきの話

(採話地区名不明)

昔、おじいさんと娘三人とが暮らしていたんだそう。おじいさんが山へ栗撒<sup>あわま</sup>きに行ったんだって。そしたら、大きな石があったんだって。石があつて自分でかたそうと思

つてもかたせないんだと。おじいさんが独り言、言つて、「やあやあ、この石かたしてくれたらなあ。娘三人持ったが、誰でもよいから、嫁にくれてえなあ」そう言つたらしいんだな。それを鬼が聞いてて、山から出て来て、

「じいさん、じいさん、今、何言つた」

「いや、何でも言わない」

「独り言、言つていたでねえか」

「誰でも、この石かたしてくれたら、娘三人持ったが誰かひとりやるべと、それだけ言つたんだ」

「じゃあ、俺がもらう」

つつて、鬼がチョイチョイとその石をかたしてくれたんだと。さあ今度、鬼のところへ娘にやるなんて大したことだから、おじいさんは病気になるっちゃつて、はちまきしてウンウン寝てるらしいんだ。姉の娘が、

「おじいさん、どうした。お粥<sup>かゆ</sup>でもお湯でも飲まねえか」

「やあ、お粥もお湯も何も欲しくねえ。親孝行だから、鬼

のところへ嫁に行つてくんねえか」

「とんでもねえ話だ。鬼のどこさ誰が嫁に行く者がある」と行つてしまった。そしたところが、こんだ二番目の娘が来たんだと。

「おじいさん、寝てばかりいないで、お湯とかおじやとか粥とか食べねか」

「いや、お粥もおじやもいらねえ。親の一生のお願いだから、鬼のところへお嫁に行つてもらいたい」

そしたら、二番目の娘も、

「とんでもねえ親だ。鬼のどこへやるなんて」と怒つて行つてしまった。

こんだ三番目の娘がやつて来て、三番目も、

「お粥とおじやとか食べねか」

ついたら、

「おじやもお粥も何もいらね。俺は、鬼に石かたしてもらつて、娘、嫁にやる約束した。ふたりともだめだが、俺のそれこそ一生のお願いだから、行つてもらいたい」

と言ったら、三番目の娘は、

「親の言いつけだから親孝行はやっから、俺が行きます」  
って言ったらしいんだな。そして、いついく日に迎えに行  
くからつんで、鬼が迎えに行ったらしいんだな。仕方ねえ  
から、娘も泣く泣く山さ行ったんでしよう。

ところが、鬼もいいところに家を作って何気なしに暮ら  
していたんでしよう。

三年も過ぎたら子どもができて、子どもできたから親元  
さ行きてえつって、鬼と一緒に来たらしいんだな。そして、  
家と一緒に来たなら、鬼の子どもは何かしら語るようになって  
たんだが、鬼は節分のとき迎えに来るって約束して、山さ  
帰って行ったと。

二月の四日の頃には、鬼が迎えに来るんだと。家で心配  
してたらしいんだな。ところが、その息子が、

「そんなこと心配すつことねえ。おれが首切ったのを立て  
てさらして、豆を炒って、この豆をもちでたら、迎えに来  
るようになって。そして、豆を撒いておけ」

つって息子の首をさらして豆撒いたんだって。そして、こ  
の豆が生えたら迎えに来いって言った。炒った豆だから生  
えるわけないでしょう。

何度来てみたって、豆が生えてねえから、その伝説で豆  
撒きがある。鬼にぶっつけたというので、このごろは息子  
の首の代わりに、魚の頭を立てる。

#### 弘法さまの石

(西会津町・杉山)

弘法さまが休まはった石だつて。ちゃんと、こうお尻つ  
いて、両方の足の跡がありましたよ、弘法さまの足跡が。

そんな石、みんな工事で持ってたんですから、なくな  
ってしまったですよ。御影石で大っきな石でした。ここ  
下の方の川の岸にあったんですよ。

上野尻の山には椿の木が一本もない理由

(採話地区名不明)

鎮守さまが、昔、柿の皮で足を滑らせて、椿の枝で目をつついて、井戸に落ちたので、上野尻の山には椿の木が一本もない。

お釈迦さまの話

(西会津町・弥平四郎)

あつたど、昔々大昔に。狐とうさぎが野原にいたつたんだそうだ。ところが毎日毎日、野原を駆けむぐつて歩いていたけども、うさぎは苦しい苦しい、ただ草だけ食べて、そして何も他のものは食べらんなかったんだと。ところがきつねは村へ出て来ては、他の鶏を捕ったりしていたとこ

ろが、ある日、大雨か雪かひどくなつて、いてもたつてもいられないときに、ひとりのおじいさんが野原を通りかかったと。そしてうさぎのいたところで、

「ここらで小屋でもないか」

と、おじいさんがうさぎに聞いたところが、

「山小屋はないけど、あそこに大きな木の根元に洞穴ほらあながある。そこへ行って入って雨宿りしたらいいでねえか」

と、うさぎは親切に教えてくれた。そしてところが、狐は夕方また、

「おい、うさぎ君、今日は何かうまいものがあつたか」

うさぎは、

「相変わらず何もない。おら俺は草ばかりしか食べられないんだ」

ところが、狐の方は、

「今日は魚食べたんだ。俺は毎日毎日、魚と肉をあり余つて困るんだ」

と大いばりしていた。それで、じいさんの前でその話をし

てるんだ。したら、じいさんが、

「おまえたち、俺は、腹が減って動かねえだ。疲れて明日にも死んでしまうから、俺の食うもの何か見つけてくんねえか」

と言ったところが、

「そんな、わけねえだ」

狐の方では、

「俺、鶏持って来っから、鶏(こちそう)つっおすつから」

と言って、村から盗んで持って行って、じいさんに食べてもらった。ところが、雨が相変わらず二日も三日も止まず雪は止まず、びしょ濡れになって、うさぎは夕方、しょんぼりと帰って来るだけで、何も持って来られなかったと。

それで、こんどはある日のこと、うさぎの方では、

「狐、あんなにあのおじいさんにいろいろな魚だのお菓子だの、いろんなもの持って来て助けてるのに、俺としては何にも持って来ることはできねえんだ。はて、どうしたらいいだろう」

と、うさぎは考えていたところが、

「じいちゃん、何にも持って来られなくってすまなかった。俺の行くところは何も無いんだ。狐はどこへでも行って、鶏でも魚でもお菓子でも持って来られっけども、俺は持って来れね。それで、夕方は必ず持って来るから、ここへどんな大きな火、焚いておいておくれ。雨の降るときに、どんどん火を焚いてもらえつと、焼いて食えるから」

と言って探しに出て行ったけど、何時間経つても帰って来ないから、

「はてな、今日はうんと見つけたから、きつと(背負って)しょつて来らんねえんだろう。うさぎ、火焚いておいてくれなんて言ったから、きつと何か持って来(く)つだろう」

と思つて、狐は一生懸命じいちゃんとふたりで火を焚いていたつたと。

夕方暗くなるきわに、帰って来たうさぎを見たら、相変わらず、びしょ濡れになっていて、しょんぼり帰って来た。

「じいちゃん、申し訳ありません。何とかして、じいちゃ

んに何かやりたいと思って一生懸命になって歩いてみたけど何もなかった。そのかわり、ささげるものはこれしかないんだ。どうかこれを食べて丈夫になって家へお帰りください」

と言って、その今までボンボンと燃え盛る中に飛び込んで、わが身を焼いてしまったと。ところで、おじいちゃんは、

「ああ、感心だ。あれほど、わが身を焼いて、俺の命を救ってくれるという気持ちは、世の中の鏡に示なくてはならない」

こういうことで、そのじいちゃんは何であったかというところ、お釈迦様であった。そのお釈迦様が、夜には世界の鏡にしようというわけで、お月様にうさぎの形を取り入れて、うさぎを、生涯忘れてはだめだということを残していったんだとき。

## 割り石

(採話地区名不明)

その山の麓に大きな岩がある。その岩さ、ひびが入って奥まで入れるだが、奥に入れば入るほど、平らな石が敷き詰めたようになってる。ここに、弘法さまが居ちやうとか言うだが、どうだか。

今の安座ができるまで 〈弘法大師にまつわる話〉

(西会津町・安座)

昔々、今の安座はたつぷりと水ののった沼だった。そしてな、その沼には頭が七つも八つもあった大蛇が住んでいた。あるとき、そこを弘法様が通りかかって、沼地の底をゴマがらでつついた。すつと、その穴からスル

スルと水がひけて、今のような岩地ができたのだと。それで、その沼の主は、なんしろ体がでつかくて、頭が七つも八つもあるで、行ぐともねくて、そのまま死んでしまったのだと。それを葬ったのが、今の蛇塚だ。

ところで、岩地になつまつた安座は、水がねくて困った。それで、こんだ、弘法様がこの地に杖をさしたのだ。そこから水がこんこんと吹き出で泉がなつただと。その泉は、いくら日照りが続いても、水が枯れることもねくて、今でも湧き出でいるだ。

※この話は、『八蛇沼の大蛇伝説』として知られている。

『西会津町史第六卷（上） 民俗』参照

弘法大師とあまんじやくの話

（西会津町・安座）

向こうの山があんだ。そこで昔、弘法さんが二十一日間修業したことあつて、二十一日すますと、この山が高野山になれつて言つてな。

そしたら、あと一晩で二十一日になるはずの夜のことさ。まだ夜の明けぬうちに、あまんじやくが来て、一番鳥の真似さしたつと。弘法さんはすっかりだまさっちゃつて。朝だと思つて修業を止めたのだとが、まだ朝で眠つたんだな。

それで今度は、高野山にはなれんて言つて、そこさ、お姿刻んで、そん山越えて新潟県の方さ行つてしまつただと。大道二年のことだっけがな。

胡麻ごまを作らぬ話

(西会津町・安座)

昔、弘法さまが、ベコの糞の上へのぼっただと。そして滑って、胡麻んがらで眼をつついたいただと。そって弘法さまさ片目、不自由になった。

よく目、見えねえで歩いていたで、こんだ井戸へ落っこちただと。そんで胡麻は作らね。牛は飼わね。井戸は掘らねってなったってことさ。

今でも、胡麻を作ると良いことねえって言われてるだ。

ばか婿の話

(西会津町・青坂)

ばか婿が嫁の里に年始に行った。かあちゃんが心配して、

行くときに、そののうちに行くのと立派な碁盤があるから、それが出たときは、肩を出して、ポーンと一つはたいて、「まことに結構な碁盤でございますな」と、こう言って褒めなさい。それから、節穴がひとつあつから、

「これは、十三仏でも掛けなすつと、まことによくなりますな」

と言つて褒めろと言つた。そうして行つたところが、挨拶の言葉を忘れてしまった。

「はてな。こりやどうしようかな」

いろいろ考えて行つたところが、ちょうど途中にきこりがおつて、大きな松の木を切り倒しておつた。ワツサワツサと。それに見とれてみると、しばらくして、ガラガラワツサーンと木が落つこつたわけだ。きこりのところへ行って、「実は、今日初めてかかの里へご年始に行くのだが、挨拶をひとつ忘れちまつた。何と言つたらよかんべかな。じいさん、年がらだ、ひとつ、教えてくつつえー」

とこう言った。

そしたらそのきこりは耳が遠かった。それで、

「ああ、そうだな。これか。これは根っこの方は白にして、

真ん中は板をひいて、裏の方は杵きねを作んだ」

こう言って教えた。きこりは、自分の倒した木をどういう風につきかと思っただけで、ばか婿なもんだから、それをとんないで、ああいいこと聞いたと思っただけで、そのまんま、まずお会いしたら、それやったっていうんだなあ。

「まあ、どうも。根っこの方は白にして、真ん中は板をひいて、裏の方は杵を作ります」

何だか、つつけんどんな挨拶されて、

「はて、聞いたこともない挨拶だなあ」

と思っただが、

「まあ、それはいいわ。庭へでもあがって、庭へあがった。

「何か、碁盤でもあるかな」

と、キョロキョロしておったところが、八十ばかりになるおじいさんが、寝間着のまま出て来なされた。それで、ろくすっぽ帯もしてないから、前の方が広がって出てきたわけだ。六尺ふんどし禪ぜんを巻いているわけだ。たまたま、そのじいさんが、こんな大きな脱腸で、六尺禪で、うんつらうんつら出て来て、

「婿どの、よく来てくださった。わしゃ持病でこの通りよ」なんて前広げてお座りになったけども、肝心なものが前へ出てくるわけだ。赤くなってね。

したらその婿が、

「碁盤とはこのことだな。褒めるのは、このときだ」

とばかりに、扇をガラリと腰から抜いてその大事なものをポーンと殴りつけて、

「まことに、結構な碁盤でございますな」

とこう言ったと。日頃どうしようかと思っただけを扇で殴られたもんだから、じいさま、いてもたってもいらなくなかって、逃げて行ってしまった。

「やあやあ、これは、とんでもない婿だわい」

と思った。

そうしているうちに、今度は若いしゅうとめおや姑親が出て来なきた。た。

「おらのうちの馬、この付近ではめったにない馬だ。見てくれ」

てわけで、馬屋から馬を出して、ドウドウとこう、たてがみをおさえて、二、三度まわしてみた。まことに品のええ立派ない馬だった。ところが、馬鹿婿なもんだから、馬出されたって褒めようがない。はてどうしたもんかなと一生懸命見たところが、馬の尾っぽの後ろの方に『ばこたれ穴』があったそうだな。それを、

「先に、十三仏でも掛けて褒めなさいと言われた節穴はこれだな」

とあって、その馬を出し終わったとき、

「いや、まことに立派な馬だが、困ったことに節穴がひとつあります。ここへは、まあ十三仏の掛け軸でも掛けたら、

まことに立派なもんになりましたよなあ」

とこう言つて褒めた。

全くもつて、ばか婿の評判通り、取り柄がなくつて、姑の家でもあつけにとらっちゃったという話があるそうだ。

ざつと昔、栄えました。

沼沢沼と大清水の湖底がつながっているという話

(西会津町・安座)

この安座には、大清水つう沼があるだが、この沼が三島(※注釈あり)の沼沢沼とつながっているそうだ。

昔な、機織りのおさを大清水に落としただと。すつと、しばらくして、そのおさが沼沢沼に浮き上がっただと。この大清水はいくら暑くて他の川が干上がったとしても、いつも水が、みなぎってて、水、なくなつたことねかつただ。

昔は、この水かます(かき回す)と雨になるって言って、雨乞いすつときは男の人さ、みんな袴はいて集まって、ダッバダッバかましたもんだ。

【覆刻版付注】

三島町の沼沢沼・・・と記述されている部分は、福島県大沼郡金山町にある沼沢湖のこと。

のろぼうずの話

(採話地区名不明)

昔な、その向こうの峠を越えるとき、夜になるのが、恐ろしかったもんだ。のろぼうずが出るとか言われてな。

のろぼうずっていったら、でかい入道のことだ。峠をズ

ンズン登つてくと、目の前さ、大きな黒いのろぼうずが、ヌツと出て来るだと。それで、旅人は慌てて逃げ帰って来ちやもんだ。

今じゃ、そんなことも聞かなくなったかな。

## 【民話によせて】

弥三郎婆によせて

竹谷寿々代

私には弥三郎婆について語る資格はない。しかし、昭和五十年の春、明学院御住職、丸山信晃氏が『山形県屋代郷神社霊験記』の中から妙多羅天女の縁起について説明してくださいったとき、深い感銘を受け、以来、弥三郎婆に想いを寄せる者である。そこで大変生意気ではあるが、弥三郎婆の話について、少し感想を述べさせていたいただきたいと思う。

丸山氏が説明してくださった話は、簡単に述べると、ほぼ次のようである。

御冷泉天皇の時代、一本柳平方城は、渡会弥三郎平安信という武将であった。彼の妻は岩伊戸御前といい、天人の

再来といわれた人であった。二人の息子を弥三郎宗長といった。

渡会家一族は非常に繁栄したが、源氏との戦いに破れ、安信は死亡。妻子は民家に落ちる。弥三郎が十八になったとき、嫁をとり、仲良く三人で暮らしていた。

ところが、弥三郎は武将者修業に出、その間に孫が生まれるが、百日咳で死んでしまう。嫁も続いて死亡。

落胆した岩伊戸御前は悲しみのためか狂い、一晚のうちに白髪の老婆となる。神出鬼没、雲を呼び、風を吹かすことができた。そのうち強盗を働くようになり、三年たった。

そこへ弥三郎が帰ってきた。息子と知らない婆は、おっかな橋で襲いかかり、逆に片腕を切られる。弥三郎が腕を持って家に帰ると、母は寝ている。彼が腕を見せると、

「これこそ、わが腕なり」

と叫んで、お前のために軍用金を集めていたのだと言い、天井から逃げ、弥彦山に行ってしまう。

その後、善行をつみ、死後、妙多羅天として祀られる。

この話で、まず心惹かれたのは、岩伊戸御前の変身の動機である。

彼女の不幸は、大切なものを一つずつ取り取られていくことよってやってくる。夫を失い、家を追われ、病によつて、孫と嫁を失う。おのれの身体にふりかかる病氣や苦痛ならば、耐えられる。しかし、自分の大切に思う人を、一番愛する者たちを、ひとりずつ奪われることは、何よりも辛い。身がわりになることをどんなに願ったことだろう。

間接的に苦しめることが、直接的に苦しめるよりも、より一層着実に、残酷に、やり場のない悲しみと痛みの深淵へとおとしめることになる。苦悩は、二重三重の構造をなしている。彼女は念入りに不幸に追いやられていくのである。

しかし、変身の動機は、この失うことによる不幸ではあるまい。愛する者を失った絶望だけならば自殺すればよいのである。絶望から鬼は生まれぬ。

婆を死に至らしめなかったものは、弥三郎の存在かもし

れない。しかしそれだけではあるまい。悲しみの大きさが、大きすぎるゆえに忘れ去ることも流し去ることもできず、彼女を不幸におとしめた、世の中の『流れ』というものに対する、怒りや憎しみや恨みになったのではないだろうか。それが彼女を死の方向に向かせずに、『鬼化』の方向へと、向かせた一つの原因ではないかと思う。弥三郎の存在を考えた上での、彼女の、生に対する執着だけではあるまいと考える。

『流れ』というのは、大変曖昧な言い方である。しかし、彼女の恨みの相手は漠然としたものである。このようない方しかみつからないのである。強いて言えば、彼女を不幸にした根本の原因は、渡会家にとって主家である安倍家と、源家との戦いであろう。しかし、彼女の恨みは、この権力を持った両家に対してではない。つつましくかに生きてきた自分に幸を与えない、大きな流れに対してである。それは、神や仏に近いものであるかもしれない。彼女には、自分が不幸におとしめられる理由がわからないので

ある。

本当に悲しい話だと思った。彼女の慟哭を聞く思いがしたのである。

## 犬の宮の伝説

守屋晴子

昔、高安にむじなが住んでいた。むじなに白羽の矢をたてられた家は、十五才の娘をさし出さなくてはならなかった。ある年、庄屋の娘がさし出されるときに、地藏様の化身である坊さんが迷い込んで、村に泊まった。そして、むじなが酒盛りをして踊りながら、

「かいの国の三毛犬(みけけん)、四毛犬(しけけん)にこのことばかりは聞かせるな」

と言っているのを耳にする。そこで庄屋は二匹の犬を借り

てきてむじな退治をする。だが二匹の犬も力尽きて死んでしまったので犬の宮を祀った。

入部直後の何もわからない私が初めてつかまえた民話が『犬の宮の伝説』だった。それは高安の大きな農家の主婦である血色のいいお婆さんの口から飛び出して私の胸に納まった。子供のように無邪気に聞き入ることができなくなってしまうとは感じながらも、冷静で優秀な民話採集者ではなかった私は、その不充分なだけ、素朴な聞き手だったような気がする。十五才になる娘の美しさ、悲しさを思ったり、勇敢な犬の出現に（そうこなくっちゃあ！）と喜んでみたり、何よりも、酔ってうっかり弱味を口走ってしまふむじなの愚かさを気に入ったりもした。

話の筋も明快で、人間の立場から見ると限りめでたしめでたしで終わり、この伝説が生まれて語り継がれた底には健康なお婆さんの明るい顔、太い首、どっしりした腰などというイメージが重なる。そして今は東京で働いているという息子さん達が、まだ私の生まれていなかった昔に、同じこの

こたつでおばさんから話を聞いた雪の夜があったことを思うと、このおばさんの、きびしく単調で重労働に明け暮れた数十年を美しく、ビクともしない生き方だと思った。

数日後、私は教えられた『犬の宮』に行ってみた。人家から少しはなれた暗い小さな杉の森に腰まで雪につかっちはいっていくと、朱のはげ落ちた鳥居のむこうに、お宮がつつましく祀られていた。合掌して（私の知らない遠い昔から、こうしてずっとここに祀られているのですね）と見あげると何だか妙な気がした。時が逆流して百年前にもどっても、ここはやはりこんな風ではなかったろうか。今、生きて呼吸している私からみれば、自分自身の確かな生命力と比べて伝説の中のむじなも、三毛犬、四毛犬もとても微かな存在感しかない。

しかし百年も生きられない私の守ろうとしているものは、本当はひとりの人間の一生とは比べものにはならない程長い時を生きてきた。それらが生き得る風土や心が失われようとしている今、民話のみが独立して保存されることにも

重要な意味があると言われれば集めましょう。実際、資料としてしかるべき所に残されている方が良いと思う。しかし、個人的に手もとに置きたいとは少しも思わない。犬の宮の伝説をはじめ、資料としての収穫以上に私を満足させたのは、実は私自身がいろいろ端で、祖父や母の話に耳を傾けた子供時代をもっていたと思ひ出させてくれたことだ。感情の鈍麻によって忘れがちだった、過ぎ去った子供時代に置いてきた美しい、やさしいものに気づかせてくれたことだ。

翻字の作業は味気ない。それより何十年かして、働きぬいた小さい丸いおばあちゃんになって、ほのぼのとした昔話をするほうがずっと素敵だと思う。

その頃、あの杉の森に犬の宮はあるだろうか。なくてもいいし、あれば尚いい。

## 合宿の思い出

広田真理子

大学を離れて丸三年。今、私の大学生活を思いかえしてみると、日文研民話分科会における活動・合宿は、単調な生活にひとつの変化を与えてくれたものとして残っています。

雪のほとんど降らない土地に育った私をむかえてくれた何メートルもある雪。一面の雪がうれしくて、うれしくて・・・記念撮影をしようかと歩いて行って落ちた溝。胸までつかってアップアップ。みんな楽しんで雪合戦、雪だるま。いい年をして・・・

でも夢中だった。雪の野原での食事もしました。私たちにとって、とってもうれしかった雪。この土地で暮らす訳ではない、ほんのちよっぴりの滞在だから・・・本当の雪の恐さ、不便さも知らないまま。

この雪と土地の人々は何か月も戦っている。雪と密着し

た生活。そんな中から生まれてきた民話、その時はあまり考えなかったように思います。

夏もまた楽しさいっぱい。川原でのお昼、水遊び、夜の花火、盆おどり・・・と。

合宿の一部として行った自炊もそのときはたいへんだつたが、今では楽しい思い出のひとつです。どこに行ってもきちんとそろっている自炊道具。ちっとも不便は感じませんでした。献立には多人数、決められた人数、少ない時間、しかも栄養のあるものと、いろいろ頭を悩ませました。材料も計算違いをしたり、買い出しもたいへん。店の中をあちこちうろろ。材料がそろわなくて途中で献立を変えたり・・・ときどきテーブルには、採集のときのいただき物。トマトやきゅうりなどが並んだこともありました。

卒業後、教職に就き、ときどき子どもたちに話す採集してきた民話。目を輝かして聞く子どもたち。むずかしい方には注釈をつけながら、なるべく聞いてきたままを話すようにがんばっています。

話しながら浮かぶおじいさんおばあさんの顔、遠い昔を思い出しながら、なつかしむように話してくれたおじいさん。あまり人前で話すことに慣れていないせいか、はずかしそうに話してくれたおばあさん。こたつに入りながら聞いた楽しい思い出。このような機会に恵まれた自分を幸せに感じます。

「○○家へ行けば知っているかも知れない」と、わざわざ電話してくださったり、一緒について行ってくださった方。

「昔話は知らないけども、まあ、あがってお茶でも・・・」  
と言ってくださった方。このようなやさしさ、あたたかさの中で、合宿は成功してきたと考えているのは私だけではないと思います。

今、民話是一種のブームとなっています。民話に関する絵本、本、テレビ等氾濫しています。国語の教科書にも、一学年一教科位の割合で民話・創作民話が採用されています。

一方、交通の発達・マスコミの普及の中で、昔から語り継がれてきた民話は消えかかっています。

民話を生で聞く機会をもつことのできた一人として、また、小学校教員の一人として、民話をどのようにどのような形で子どもに与え、教えていったらよいか、真剣に受け止め、考えていかなければいけないでしょう。

#### 合宿の思い出

雨宮さとみ

私が初めて、民話分科会の合宿に参加したのは、今から四年程前の冬でした。

東北の雪深い山村で、ジーパンも長靴もびっしりにして歩いたこと。そんな私たちを温かい炬燵に迎えてくれたおじいさんのこと。お茶を飲みながら、ポツリポツリと語

つてくれたお話。初めて食べた『たんぼもち』の美味しかったこと。今でも、思い出す度に懐かしくなります。

「東北の春はきれいなんだ。いろんな花が一斉に咲き出してな・・・」

そんなことを言いながら春を待つ人々。

「昔語りを、とんと昔を・・・」

とせがむ私たちに、

「うそか本当かしらねけど」

なんて笑いながら語りはじめるおばあさん。歩いて歩いて、そんな人々に会えたときの喜びが忘れられません。

幼い頃、おじいちゃんの手の上で聞いた伝説や、私が眠りにつくまで、枕元で、母だったのか、おばあちゃんだったのか、何度も繰り返された昔話。その包み込まれるような、かすかに土の臭いのする昔話の世界に、私の心は住んでいるようなのです。なぜやら、未だに。

#### 昔話など

永井英男

私が昔話を大学のクラブで扱うようになったのには、高校時代に所属していた民俗学研究会の影響がある。『温故知新』とかいうふれこみで、新入会員を募集していたのにつられて、私ともう一人の友人が入会するまでは、会員がたった二人という研究会だった。

そのときの二人のうちの一人が、藤川君である。藤川君とは、その後なぜか大学に来てからも学科、クラブともいっしょになることになってしまった。その民俗学研究会には一年もいなかったのであるが、指導の先生が熱心で私達をあちこちに連れだしてくれた。県内の年中行事や付近の農家の仕事を見せてもらったり、神社の祭礼や民俗系の博物館を見て回ったりした。

そんな中で、数は少ないながらも県内の伝説や民話に触れ、東北や上信越に行けばまだまだたくさんのお話が伝わっ

ているということも知り、いつか民話をたずねて旅をしてみたいと思っていた。しかし、大学受験をひかえていたので、民話を相手にするのはしばらくおあずけになってしまった。だから、大学にはいり、日本文化研究会は、その高校以来の希望を実現するには多少の見込み違いもあったが、一応適当な場所だったのである。

今回の合宿は、私には四回目になるが、いつも考えさせられるというか驚かされるのは、実際に現地に来てみると、見るもの聞くものその収穫は民話だけに限らないということである。そして、そのことは、私の社会的視野を拡大し行動の範囲を広げるに当たっては、かなり重要な役割を演じていた。

たとえば、高島では、生まれて始めて炭焼き小屋に行った。数年前に会津に行ったときに、若い頃炭焼きをしていたという人に会い、炭焼きについて詳しい話を聞いたことがあった。その話の中には、実に『人生』があったことを思い出す。以来、話に聞くだけでは物足りなく思っていた

ところだった。小屋は山の中腹にあり、下を流れる川とその周辺の部落が見渡せる所に建っていた。小屋の外側には原木を並べてある。私達が行ったときには、焼いた炭を搬出した後で、こわれたカマがその内部をのぞかせていた。小屋の一隅には一坪ほどの板の間があり、ランプが提げられていた。カマに火を入れると一昼夜はずっとカマから離れられないため、夜、仮眠をする場所だという。

これはほんの一端で、各家々を回って昔話を聞いて歩く際にも、そこでいただく茶菓の類に土地柄を感じたり、民家の造り、集落の様子、養蚕などの生業等々から土地の人の親切さにいたるまで限りがない。我々の仲間が等しく感じたところである。

このような経験をこれからもより多く持ちたいものである。

藤川 誠

山形県高島町での民話探訪は、大学生活三年目の初春だった。まだ雪深い山道に備え、厚手のジャンパーに長ぐつ姿で宿舎を出る僕を見て、

「お前、ドカタやったことあるな。似合うぞ！」

とG雄が笑った。それを聞きつけたR女は雪道を走って来て、

「どれどれ、どーれえ？」

と僕の顔をのぞき込んだ。

「このままでは後輩達に侮られてしまう」

一計を案じた僕は、初日から僕と組むことになった探訪初参加のH女を『シゴク』ことにした。

「いいかい、話者の名前と年齢などは必ず書き留めるんだ。

話の要点もメモしなさい。それが君の役目だから、いいね！」

と命じる僕をチラッと見て、

「ハイ！」

という返事ひとつ。まだ反抗せず。

一軒一軒、民話を聞いてまわることには実地の経験を積んだH女は、後半、僕が録音とメモに気をとられている間を話者と調子良く話せるようになった。それでも家を出るごとに、

「名前は？」

と確認の指示。

「書きました！」

の返事。

夕暮どきの帰り道、

「さて、今度はこっちの番・・・」

とばかり、僕を当惑させることばかり言い始める。『かえり討ち』にあわせようというのだ。

H女は、その晩、

「名前！名前！」

と寝言を言ったとか。伝説は夜作られるのだろうか。何は

ともあれ、こうして民話調査の仲間が、またひとり生まれ  
た。

S女は民話採訪二度目である。

「藤川さんとお？ 疲れそう！」

と僕の顔をみて、出発前から笑いこぼっていたので、S女  
もシゴクことにした。

調査事項の分担と話のリード役の交替について詳細に打  
ち合わせを済ませ、目的地へ。途中で村のおじさんに道を  
たずねたら、

「だんな、そっちの道よりこっちが・・・」

と僕に言った。この日からしばらくの間、僕は、

「だんな、だんな！」

とS女達にからかわれることになった。

目的地までの道すがら、冗談の言い合いに疲れたS女は、  
コタツで語る話者の昔話を聞きながら、その手を忙しく菓  
子皿のほうへ動かすのだった。

ねむの木に美しく花の咲く西会津の山村は、セミの鳴く

真夏日の中にあつた。

山村を民話を求めて歩きまわる間に、ねむの花の名前も  
知らないお嬢さん育ちのN女に植物の名を教えることが僕  
の仕事になった。行きの道で教えた名前を帰り道で復習す  
る。大きな『たばこ』の葉を見分けられるようになったの  
は、二日目の朝だった。

N女と歩くと民話以外の収穫物も多かった。

「自炊しながら調査来てるんです！」

とN女が強調するので、村の人が不憫に思ってたか、背負い  
かごと手さげ袋を貸してくれて、その中にいっぱい野菜を  
くれた。その重かったこと。二人して陽のかたむいた小道  
をヨタヨタ歩く姿は、さぞ見るに堪えなかったことだろう。  
宿舎の窓から仲間達が手をたたいて迎えてくれ、貴重な写  
真をとってくれた。

「夏の山道はマムシが出るぞ！こういうのが」

と一升びんに入っている生きたマムシを一軒の農家で見せ  
てくれた。後日、焼酎漬けになるのだそうだった。『女性は

蛇をこわがり、きらう』とばかり信じていた僕の横からM  
女が、

「これがママシ？」

というような、ふしぎそうな顔をしてのぞき込んだ。そう  
いうM女の顔を今度は僕がふしぎそうにのぞき込んだ。

「そのびん持って、こっち向いて！」

と頼んだら、ヒョイとびんをつかんでポーズ。僕のカメラ  
には、ママシの入った一升びんと、それをつかんでいるM  
女の手だけが写った。

民話を求めて村々を歩くと、僕達の知らなかった世界を  
垣間見ることが出来る。村の人達とも知り合いになる。そ  
うした中で、民話を聞き歩く僕達もお互いに気づかなかつ  
た一面を知り、そして学び、そしてお互いの顔をふしぎそ  
うにのぞき込むのである。

## 私の民話

津田奈都子

大学生活四年間の中で、一番、実在感とともに私の印象  
に残っているのはサークル活動で民話採集に出かけて行っ  
たときのことである。合計三回、南会津、高島、西会津を  
訪ねた。

私と民話との出会いは、遠く十年以上も前に遡る。

「むかしむかし、あるところに、おじいさんと、おばあさ  
んが・・・」

なかなか寝つかれない、おばあちゃん子の私に、祖母が、  
布団の中で語ってくれたのである。『桃太郎』かちかち山』  
『浦島太郎』、そして、ぼた餅を「どっこいしょ、どっこい  
しょ」と言う『ばか息子の話』など。単純で短い話なのに、  
飽きることなく何度もせがんだものだった。

そして十数年経って、民話ブームの波に乗って、ラジオ  
で放送していた『ふるさと民話』が私の耳に入ってきた。

このときの懐かしさ。しばらく忘れていた、何か遠いもの、大切なものをふと思い出したようで、心が暖かくなっているのが、自分でも分かった。

大学に入って、『みんな』という、たった三つの文字に惹かれて、『日本文化研究会』サークルに入った。そして採集の合宿・・・

ある日のこと。

「あのーお、おばあちゃんのぎつとむかし、聞きたくて、私たち千葉から来たんです。」

「えっ、ぎつとむかし・・・忘れちゃったなあ。でも、まあ、あがって休んでいきなよ」

見ず知らずの私たちを何の警戒もなしに、家に招いてくれる。今はもう火のない囲炉裏と、部屋で大きな顔をしているカラーテレビを横目で見ながら、

「おばあちゃんが一番好きなぎつとむかし、聞かせてください」

はじめは、

「忘れちゃったなあ」

と尻込みしていたおばあちゃんも、炬燵の上に自家製の漬物とお茶が並ぶ頃になると、

「むかし、あるところに、娘三人持った人があったと・・・」と始まってくる。私たちもついつい、身を乗り出して、

「ウンウン、それから・・・」

と夢中になっていく。

また、ある日のこと。

八十歳を過ぎたおじいちゃんは、『こぶだしじいさん』の鬼の踊りのところになると、自分もすっかり民話の世界に入り込んでしまって、太鼓の音を歌いながら、踊りだした。

おじいちゃんの輝いた目。そしてそれを聞き、見ながら、思わず笑う私たちの目。これほど、心と心のふれあう時があるだろうか。

最後に、おじいちゃんは言った。

「話を聴いてくれてありがとう」

突然、のこのこ出かけて行って、仕事の時間をつぶさせ

てしまった私たちに、お礼を言ってくれた。

「元気で長生きしてくださいね、また来ます」

私たちもおじいちゃん以上に頭を低くしながらお礼を繰り返した。

雪の中をとぼとぼと宿に帰る途中、私の心に浮かんでいたのは、二つの思いであった。心温まる昔話が聴けたという嬉しさと、この嬉しさを感じることでできる人はもういなくなってしまうんだという寂しさであった。

確かに今はテレビ・ラジオ・絵本でたくさんのお話が紹介されている。そして、それらの中にもいいものはたくさんある。

でも私は、私の、民話を子どもたちに伝えていく方法として、今度は私が、小さな子どもたちに、直に語ってやりたいと思っている。昔話・民話は、語り手と聞き手と二人で創り出していくもの。語り手などというには、あまりにつたないが、私もおじいちゃんやおばあちゃんと同じ優しい目で、私の民話を語ってやりたい。民話のこれからも続

くであろう長い歴史に、私もほんの少し、聞き手として、語り手として、触れさせてもらえれば、幸せである。



むかしばなしの語り方分類表 ②

ことわざ	あいづち	かたりおわり	高 島 町	西 会 津 町
<p>ひるま 話すと ねずみに小便 ひっかけ</p> <p>ひるま せがむと ねずみに小便 ひっかけ</p> <p>られる</p>	<p>ふーむ</p> <p>それから</p> <p>そして</p> <p>そのあとは</p> <p>そして なんじょうになつたなやい</p> <p>それから なにしたんや</p> <p>ふーん ふーん もつと もつと</p>	<p>あとはおわり どーびん どーびん</p> <p>うーん、うーん</p> <p>どんびん(どーびん)</p> <p>どんびんさんすけ またあした</p> <p>どんびんさんすけ さるまなぐ、さるのまなぐ</p> <p>に毛がはえた</p> <p>どーびんさんすけ さるまなぐ、さるのまなぐ</p> <p>さ毛がはえて、けんけん毛抜きで抜いたれ</p> <p>ば、めんめんめつこになりました</p> <p>どーびんさんすけ さるまなぐ、さるのまなぐ</p> <p>に毛がはえて、けんけん毛抜きで抜いたれ</p> <p>ば、まんまん真つ赤な血ができた</p>	<p>どーびんさんすけ さるまなぐ、さるのまなぐ</p> <p>に毛が生えて、けんけん毛抜きで抜いたれ</p> <p>ば、まんまん真つ赤な血ができて、めんめんめつこになつたとさ</p> <p>どーびんさんすけ さるまなぐ、さるのまなぐ</p> <p>に毛がはえて、けんけん毛抜きで抜いたれ</p> <p>ば、まんまん真つ赤な血ができた</p>	<p>ざつとむかし さけた</p> <p>ざつとむかし さかえた</p> <p>ざつとむかし おわり</p> <p>そんじえ おわり</p> <p>さいご あつたとさ</p> <p>これで ちゃん ちゃん</p>
<p>ひるま 話すと ねずみに小便 ひっかけ</p> <p>ひるま せがむと ねずみに小便 ひっかけ</p> <p>られる</p>	<p>うーん</p> <p>うんだ うんだ</p> <p>ふん ふん</p> <p>それから なんだ</p> <p>いまつと いまつと</p>			

高島町・西会津町の民話（話者と題名）

《題名の下に数字は、掲載ページを表します。》

また、カッコ内は話者の居住地区名です。》

【高島町の民話】

大木喜代松（元和田）

高安犬の宮の話 . . . . . 六

糠野目の御山王様 . . . . . 二一

土屋弥太郎（高安）

犬の宮 . . . . . 七

鈴沼の話 . . . . . 一七

オオタカテンコウ法印様（高安）

猫の宮 . . . . . 八

神保まつよ（高安）

猫の宮の伝説 . . . . . 九

土屋たかの（高安）

弥三郎ばんば② . . . . . 一四

黒田梅野（船橋）

弥三郎ばんば① . . . . . 二二

菅野利享（泉岡）

おりや峠 . . . . . 一四

南の山の馬鹿むこ . . . . . 二四

二階堂ハル（日向）

猿むかし . . . . . 一八

菅野キウ（熊前）

はん子 . . . . . 一九

高橋うめよ（相森）

狐むかし . . . . . 二四

斉藤傳七（亀岡）

こぶ出しじいさん . . . . . 二七

我妻孔（佐沢）

おいとからいと . . . . . 三二

話者名不明（露藤）

佐兵ばなし . . . . . 一〇

話者名不明(採話地区名不明)

和尚と小僧の話 . . . . . 二六

【西会津町の民話】

五十嵐寅八(松尾)

首塚・胴塚・足塚 . . . . . 三七

長谷川伊佐海(綱沢)

鉄火の裁き . . . . . 三八

猫檀家 . . . . . 四一

狐の証文 . . . . . 四二

阿部ミヨノ(山口)

猿むかし . . . . . 三九

三留静雄(青坂)

機織り滝 . . . . . 四一

三留光子(青坂)

鬼ばばと和尚さま . . . . . 四四

三留保(青坂)

ばか婿の話 . . . . . 六二

高橋福江(小綱木)

三匹の有名な狐 . . . . . 四四

小椋茂(弥平四郎)

鬼んばの話 . . . . . 四九

お釈迦さまの話 . . . . . 五八

宮野??(真ヶ沢)

みょうたらてん . . . . . 五三

佐藤ミツ(杉山)

弘法さまの石 . . . . . 五七

渡部長左衛門(安座)

今の安座ができるまで . . . . . 六〇

弘法大師とあまんじやくの話 . . . . . 六一

胡麻を作らぬ話 . . . . . 六二

話者名不明(安座)

沼沢沼と大清水の湖底がつながっているという話 . . . . . 六四

話者名不明（採話地区名不明）

スズメと甘酒の話	五二
豆まきの話	五五
上野尻の山には椿の木が一本もない理由	五八
割り石	六〇
のろぼうずの話	六五

【民話分科会名簿】（学年は一九七五年度）

郡司秀明	一年（工学部）
笹川香寿江	一年（教育学部）
雨宮さとみ	二年（教育学部）
竹谷寿々代	二年（教育学部）
津田奈都子	二年（教育学部）

長谷川博子	二年（教育学部）
守屋晴子	二年（教育学部）
猪野明江	三年（教育学部）
小栗幸宣	三年（工学部）
菊地美恵子	三年（教育学部）
椎崎 洋	三年（人文学部）
清水公子	三年（教育学部）
滝川陽子	三年（教育学部）
永井英男	三年（工学部）
藤川 誠	三年（工学部）
若林己千雄	三年（人文学部）
磯前礼子	四年（教育学部）
廣田真理子	四年（教育学部）
鈴木雅夫	OB（工学部）
ほか	六名

## 編集後記

この『とんとむかし（総集編）』高島町・西会津町の民話採集調査報告書の編集を計画してから、二年の年月が流れようとしています。ようやく、私たちの活動の小さな一つの足跡として、この報告書を作成することができました。

山形県東置賜郡高島町、並びに、福島県耶麻郡西会津町のみなさんのご協力、また、本会諸先輩方のご指導によるものと、厚く御礼申し上げます。

私たちの活動は、奥深い民話の世界にほんの少し手を触れたに過ぎないものです。しかし、忘れ去られ、消えて行く民話を今一度見つめ直す機会が与えられたことは、非常に貴重なことだったと思います。

永い年月を通して作られてきた民話が、新しい躍動を始めることを願って、この報告書の後書きとさせていただきます。

『とんとむかし（総集編）』

山形県東置賜郡高島町・福島県耶麻郡西会津町の民話

【発行者】 千葉大学日本文化研究会 民話資料編纂部

【発行日】 一九七九年（昭和五四年）五月一日

【発行責任者】 津田奈都子

【執筆担当者】 竹谷寿々代 長谷川博子 津田奈都子

リポジトリ公開用覆刻版

『とんとむかし（総集編）』

山形県東置賜郡高島町の民話

福島県耶麻郡西会津町の民話

【覆刻版発行者】

千葉大学（旧）日本文化研究会民俗資料編纂室

代表 表 日本文化研究会初代会長 加部恒雄

【覆刻版発行日】 二〇一九年九月一日

<https://doi.org/10.20776/106357>